寝上のピアニスト

蒼雲 騎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
寝上のピアニスト

【Ｎコード】
Ｎ５５１８Ｆ

【作者名】
蒼雲　騎龍

【あらすじ】
３０を前にした女性、樋川杏子は、１８年も経ってから、従姉弟が居ることを知った。一人になり、何所と無く淋しさを感じる心に、従姉弟の存在は何故か惹きつけられるものがあった・・・。

愛はとめられない

従姉弟と・・・・・

私が、彰檎と出逢ったのは、冬の寒い日であった・・・・。　彰檎との出会いは、私の全て・・・幸せ。

十二月、クリスマスを十日前に控えた冬晴れの朝。

「樋川さーん」

六本木ビルズの前で、私は呼び止められる。

「ん？　おっ、みんなで出勤ですか、おはよう」

「おやようございます」

私の前に、今年の中途採用で入った若手の社員達が居た。　男女あわせて、４人。

私は、その子達に混じって、ビルへ向かった・・・・・

ビル内３２階＝〇〇ネットクレジット＝

私は、この階の会社に勤める。　一応、肩書きがあって、偉そうに見えるけど、ぶちゃけて週３・４日しか出ない相談役。　接客から、後輩指導から、ネットでのアンケートリサーチやら、１クール毎に色々と仕事を任される課長や部長の補佐にまわっている。

私の名前は、樋川（ひかわ）　杏子（きょうこ）。　２９歳　一応、バツイチ。　バツイチって言っても、旦那が死んだとかじゃなくて。　旦那が暴力的で、ウザイから離婚したの。

離婚して、まだ半年。　相手はＩＴ企業の社長さん、手切れ金だと馬鹿高い金払ったくせに、時たま電話を遣しやがる未練がましいアホんだら。　慰謝料だっつーの。

今は、もう完全無視で、ケータイアドレスも変えてやったし、住む所も変えてやったから、全然ウザくない訳。　ま、一人身が寂しいのはあるけど、当分恋愛は要らんと思ってる、私です。

金に一生困らない自分ですが、やはり生きがい欲しくて仕事してます。　でも、…生きがいが見つかってしまうなんて、それが男だなんて…。　私は、思いも寄らなかった。

全ての愛欲の日々は、この日の夕方から始まっていたのだ。

今日は、何でも父が田舎の福岡から来るという話だった。　夜、自由が丘にある私のマンションに、父と母が来ていた。　一人なのに、５ＬＤＫの間取りに、父が呆れていた。

「え～、明日に帰るの？　一日くらい、見物していけば？」

私は、長い髪をポニーテールにしている姿で、両親に言う。

「いや、師走でビニールハウスが忙しい。　今、隆明一人じゃけん。
　戻るばい」

「アンタの元気な姿見れて安心したさ」

やはり、両親は在り難いものだと感じた。　だが、私は両親が今日、東京に出てきた理由は知らなかった。　因みに、隆明は私の兄さん。

「ところで、父さん達なんで出てきたの？　仕事でとか？」

「いや、違うさ」

父さんが話してくれた内容は、私にもびっくりであった。

父さんに、一人、行方不明の様な妹さんが居たのは知っていた。が、その妹さんが、先月に死んでいたらしいのだ。　しかも、今年１８歳に成る息子さんがいたらしい。

父さんの話では、その私から見ると従姉弟になる息子さんが、大学に入るにあたって、身元の保証人に成って欲しいと連絡が来たらしいのだ。

寝耳に水とは、正しくこのこと。　連絡をしたのは、その息子さんの居るアパートの大家さんだったらしい

「ほえ～、マジで？　で？　、その子に会ったの？」

「うん、大人しい男でな、なんでも機械工学科なんだが、東京大学に１発ストレートで合格決定らしい。　ただ、本人に話し聞いたら、お金の問題やら、住む場所の問題やらあるから、行くかどうかは解らんと」

「え　。ーーーーーっ、なにもったいないっ」

「だけんど、かなり金必要だし、な～」

「うんだ・・働いて後からでもいいと思うし」

父は、死んだ妹さんの若し時の愚行にほとほと疲れたみたいで、昔から毛嫌いしていたからだろう。　面倒見の良い父なのに、躊躇していたのだ。

だが、私はそれは違うと思った。

だから…

「解った、父さん。　私がその子の面倒見るわよ。　住所教えて、どんな子か、見て決めるから」

「おいおい、杏子」

両親は、止めに来たが。　私は、才能を駄目にするのは嫌だし、何より従姉弟は一人しか居なかったから、見てみたい衝動にかられてしまったのである。

2日後、金曜日。

私は、午前で仕事が終わった。

「樋川さん、今日、この後如何ですか？」

若き部長の、宮木君が、誘ってくれたが。

「パース、男いらな～い。　今日は、用事あるしね～」

私は、いつもの調子で、返した。

帰る仕度の私に、入ったばかりの若い女子達がやってくる。

「樋川センパ～イ、断るだなんてあんまりですよ～」

「そーですよぉ～、一番のイケメンの宮木さんですよ～」

部長の宮木は、若いし顔いいし、しかも出来るから、女の子達には憧れの存在だ。　しかし、前の旦那をそれで失敗している。　もう、2度は要らないと思っていた。

「じゃ、みんなにあげるわよ～、彼が暇なんだから誘っちゃえば？」

すると、女子社員達は、早速宮木の所に向かって行った。

私は、今日は、従姉弟に会う日である。

さっさと出て行く。

その後、若い男女の社員達がコーヒーブレイクしながら、言っている。

「わっかんね～よな～、樋川さんって、すげ～美人じゃんか、マジ男いないわけ？」

「本当にいないみたいよ。　ま、離婚して疲れたって言ってたわ」

「でも、顔よし、体よし、頭よし、もう別に男いてもいい気するぜ。

なんか、もったいない…俺じゃ～、駄目かな？」

「お前にやるくらいなら、俺が貰う」

「おいおい、先輩はお前達もモノじゃないわよ」

女子社員の突っ込みで、話は終わった・・・・。

私は、そのままの足で、ビルズの映画館に行った。　そこが、待ち合わせ場所だった。

昨日、電話したら、援助のことをすごく遠慮して、電話の向こうで謝られた。　とにかく、従姉弟だし、顔くらいは合わせようと、説教じみた言い方してしまって。

（私…もうオバサンかしら）

なんて考えもしてしまったくらいだ。

だけど、もし今日出会わなかったら…この先、私は本当の愛に一生出会えたか解らない。

映画館の在る別館の手前の所で、私は彼を見つけた。

（ん？　あれか～？）

カップルや、若い子たちが行きかう中で、映画館と、美術館の間の通りに、少し人の流れから外れて立っている男の子が居た。

（髪が長いな～、ヲタクみたいだわ、私のパンチで泣きそうだなこりゃ）

体の線が細く、身長はやや高い。　だか、今風の男の子らしさは見当たらなく、優等生がそのまんまのように見えた。

だが…、私が近づこうとした時だ。　サラッと強い風が吹く。

（寒い）

私が、コートで身を包むと同時の時に、彼の髪がフワッと乱れた。

（え？）

乱れた髪から見えたのは、びっくりするくらいの美少年だ。　鼻辺りまで被っていた髪が、全部乱れて、初めて見える。

私は、自然に体が動いていた。　いや、誰よりも早く、彼に声をかけたくなっていたのかもしれない。

「よ、こんにちわ」

2時過ぎの陽が眩しく、白い通りのタイルが綺麗に見える。

少年は、緊張した面持ちで、頭を下げてきた。

「初めまして、御繰（みくる）　彰檎（しょうご）といいます」

「こちらこそ、初めまして。　樋川　杏子よ」

「きょうこ・・・さん、従姉弟・・なんですよね」

「そうだぞ～、オバサンいうなよ」

私が笑って言うと、彰檎君もこわばりつつ笑った。

二人して、ビルズからでて、近くのお寺に入った。　話すのにも、静かな方がいいということで…

私は、白いコート姿、彰檎君はハーフコートに黒いジーンズだ。観てからに、年の少し離れた兄弟である。　砂利のひかれた敷地内で、二人して歩く。

「そっか～、お母さん君の為だけに生きたんだね～」

「はい…、僕が大学に行かないって言うと泣くから・・、進学選びました・・・。　でも、もう母はいませんし、大学行く意味無い気がしてます・・・働いてそれなりに生きれればいいとしか今は・・・」

やはり、お母さんを亡くしたショックが大きいようであった。

「それでいいのか～？　お母さんは、君に羽ばたいて貰いたいから進学勧めたんでしょうに。　お母さん居なくなったら、もうどうでもいいんじゃ～お母さん浮ばれないわ」

「でも、もうお金ないです…。　今居るアパートだって、1月には家賃切れるし、働かないと・・・、進学どころじゃないです・・・」

「ふむ、リアルな話ね」

「はい」

「よし、お姉さんがなんとかしよう」

私は、彰檎君を見てきっぱり言った。

「あ…いえいえっ、それは困ります」

彰檎君は、激しく首を振って否定する。

「どうして?、只であげるなんて言わないぞ。　条件は出すけどね」

「じょ…条件ですか?。　自分に出来る事・・・ですか?」

「うむ」

私は、静かな境内で、彰檎君と対峙した。

「一つ、４年で卒業すること。　一つ、家事は交代制でやること。
一つ、学業を怠らずに、上を目指す事。　一つ、私を大切にする事。　以上、です。　どうだ、出来るかい若者よ」

彰檎君は、立ち尽くしたまま横を向く。

「解りません・・・」

「ん?」

「母が言ってました。　自分は、実のお兄さんに迷惑ばかり掛けて嫌われていると・・・もう頼れないと・・・、貴女は・・・杏子さんは、母のお兄さんの子なのに、僕にそんなことをする理由がわか

りません」

「ふふ～ん、ま～そうね・・・。　でも、お母さんはお母さんで、君は君でしょ？。　ま、確かに、叔母さんのことは、父さんから聞いてたけどね。　君見てると、父さんの言ってたことが丸々本当でもないな～って思うし。　一応、血の繋がってる従姉弟じゃない、こんな地元から離れた東京で逢ったのも縁だしょうに。　アタシも女だから、お母さんの気持ちが少し解る気がする。　頑張ってみてもいいんじゃないの？」

彰檎君は、悩んでいた。　私を警戒していたのかもしれないし、まだ母親の死のショックもあっただろう。

でも、その日は考えるために別れたが、３日後にもう一度会うと、素直に了承してくれた。

これが、二人の出会いで在る。

クリスマス前に

あの日から、二人の生活は始まった。　彰檎は私に迷惑を掛ける様な真似はしなかった。

寧ろ、面白いくらいになんでもやるいい子ではあったが、私からすると、物足りなくてからかいたくなる。

また、からかうと直ぐ赤くなって困る顔が可愛いらしく、どうもほおっておけないタイプである。

１２月、クリスマス・イヴの前夜だ。　事件は起こった。

私が、風邪で高熱を出してしまった。

「彰檎君、大丈夫だって…あふ～」

ぐったりする私を、彰檎はかなり心配した様で、病院に行くか、救急車呼ぼうかと言っている。

（ま、４０℃に後２分だもんね～、自分でも心配だわ）

結局、彰檎に付き添って貰って、病院に行って来た。　その日は、彰檎に世話になりっぱなしとなったのだが…。

「ありがとうね。　彰檎君が居てくれて助かったわ」

しかし、世話してくれる本人は、心配な面持ちでお粥をくれたり、薬と水分の用意と至れり尽くせり…

「彰檎君、少し休んでいいよ。　マジで働き過ぎよ～」

ベッドの上で、手をひらつかせる私だが、彰檎は頷くだけで、また洗濯に行く。　やはり、母親の世話をしながら生きて来た所為もあるのだろうが、仕事のこなしは早いし要領もいい。

（う～ん…ウチの若いヤツ達に彰檎君の爪の垢でも…彰檎君に爪の垢なさそ…）

下らない事ばかり考えているウチに、昼下がりでウトウトして寝ていた。

どれくらいか…フッとおでこのタオルが取れて、また濡らす音が…

（ん？）

薄目開けると、彰檎君だった。

（細やかで優しいいい子だわ～。　前の旦那がアホに思える）

タオルを私の額に乗せ、着替えの用意に入る彰檎に向かって、言ってみた。

「彰檎君は…お母さんの面倒をず～っと見てたの？」

彰檎は、私が起きていた事にびっくりしたらしく。

「えっ？　　おっ起きてたんですか？」

「ま～ね～、可愛い彰檎君の介抱姿見ようと思ってさ～」

「そ…そんな…」

彰檎は、横向く形で眼を逸らす。

私は、汗だくに成ったので、

「着替えくださいな～」

彰檎は、びっくりしたように頷いて、服を出してくれる。

「んふふ～」

笑い顔の私に、彰檎は向くと。

「少し元気になりましたね」

「そ～ね、優しい彰檎君のお・か・げ」

と、笑い掛けると、彰檎は横を向く。

（う～ん…、可愛いな～。　　従姉弟ながら堪らない）

と寝間着のボタンを外す中で。

「流石ね～、お母さんの介抱してただけあって、必要なの全部出てるわ」

彰檎は、杏子がいきなり着替え出して、驚いたらしく、慌てて立って。

「きっ着替え終わったら教えてください！」

その時、私ははっきりと

「ストップ！　そのまま座りなさい」

「でっ・でも…」

「見なくていいから、向こう向いて座ればいいでしょう」

「は…はい…」

１８歳の彰檎だが、どう観ても１５・６歳の少年の様に思えて仕方ない。

「彰檎君、お母さんの介抱してて、お母さん何て言ってた？」

「…そ…それは…」

「お母さんは幸せだったと思うぞ～、こんないい息子に大切にされてさ～。　アタシがそう思うんだもの、同じ女なら大抵そう思う」

「お母さん…良く…泣いてました…。　いい子が産まれたのに…何も出来ないって……僕はただ……生きてて欲しかっただけでしたけど」

「そっか…、彰檎君の大学入学の姿、お母さん見たかったろうにね」

彰檎は、静かに頷く。

その時、私は彰檎なら受け入れてもいい気がしてた。

「よし、着替えた！　さっぱりしたわよ～ん」

私が言うと、彰檎は振り向いた。

「はい」

「洗濯、お願いね～。　下着や服の匂いとか嗅いだらいけないぞ～」

彰檎はしどろもどろになって、否定する。

私は笑い

「彰檎君、今日のお礼に欲しい物言ってみなさい。　なんでも買ってあげよう。　でも…［お母さん］とかは無しだぞ～」

すると、彰檎は少し考えてから、

「あの…」

「ん？」

「本当に、なんでも？」

「ＯＫよ」

ベッドの上で座って言う私に、彰檎は躊躇いがちに言う。

「ピアノ…安いのていいです」

私は、ぽか～んとした。

「へ？　ピアノ？」

「は……い」

「弾けるの？」

「す…少し」

私は、フッと立ち上がって、

「じゃ、あげる」

「え？」

彰檎はキョトンとする

このマンションには、一番大きい部屋があり、そこには、ピアノが有った。

このマンションに、前に住んでいた人が、引き払う時に置いて行ったのだ。

「このマンションは、全て防音だから音洩れしないから、弾いていいよ」

「なんで、杏子さんはこのマンションにしたんですか？　ピアノ…弾かないのに、鍵まで掛けて部屋閉めて…」

杏子は、グサッと言われた気がする。

「あははは…、このピアノが運び出すの面倒だからって大家も言っててさ～。　このマンション安かったのよね～。　ま、ピアノでも趣味にしてみようかと思ったんだけど、アタシには弾けないから…封印」

格好つけてセレブぶってやってみたが、、まったく音感がなく撃沈した訳だ。

しかし…彰檎は隣の一番広い部屋にあるやや古めかしいピアノを見て。

「これ、凄い…ピアノだよ…本当にこれ弾いていいの？　杏子さん」

「うん」

彰檎は、直ぐにピアノに向かった。　ベランダが有る窓から、夕陽が差す中でその独奏は始まった…

フィガロの結婚…アヴェ・マリア…タンホイザー…白鳥の湖と続く。
眼を瞑り、何処までも静かに演奏する彰檎の顔は薄く微笑んでいた。
杏子は、その素晴らしいピアノに言葉を失って、風邪も忘れて立ち尽くしていた。

（す…しゅごい……この子ったら…）

彰檎は、夕陽が暗くなって、その手を止める。

「このピアノ凄い…、なんで手離したんだろう」
杏子は、彰檎にゆっくりと近寄って、いきなり抱きしめた。

「こらーーっ！、なんでもっと早く言わないのっ！！」

「えっ！？」

「こんなにピアノ上手いだなんて勿体無いでしょ！！　言えば楽譜とか買ったのにっ」

「だ…だって、ピアノは高いんですよ…学費出して貰って、そんなピアノや楽譜だなんて…」

こうして、私はピアニストと住む事に成った…可愛いらしく、いじらしいピアニストで有った…

クリスマス・イブ

２４日、クリスマス。

この日から、杏子は1月の１０日までの休みに入った。　何時もなら、もう少し働くが、彰檎の事も有ったか、長期休暇を取った訳だ。

杏子は、昨日までの高熱が嘘だった様に下がり、鼻声ながらピンピンしている。

「おしっ！、今日はパーティーじゃ～」

朝、彰檎もいた食卓でいきなりの宣言だ。

「あ・は…はい…でも、杏子さん？」

「ん？、彰檎君は用事有りかね？」

「い・いえ、いきなりの今日でケーキ有りますかね？。　コンビニで安いのとかですか？」

すると、杏子は手をヒラヒラさせて、

「んな訳ないでしょ～が」

と、笑う。

「じゃ～、作りますか？」

「え？　　彰檎君…作れるの？」

彰檎は、ゆったりとした返事で

「はい、普通のとか、ティラミスらしき物なら、母に作ってましたから」

「うは、出来過ぎ君か、君は」

「でも、安い材料だけでしたから、味の保証は出来ませんよ」

杏子は、瞳を細めて

（おいおい、毎日アタシにこんな美味いモン作っとろ～が）

彰檎は、味噌汁を飲む手を止めて、

「どうかしましたか？」

「来月、私の誕生日あるから、是非作って貰おうかと…」

「へ～、僕で良ければいいですよ」

彰檎は、邪気の無い微笑みを見せる。

「ありがとう～。　　今日の分は、もう予約済みざますのよ～、まぁ食べ物は買って来るけどね。　　ケーキは、配達して貰うのですん」

杏子は、楽しみの様におどけて言う。
彰檎は、食べ終わった皿を集めて
「パーティーって、二人だけですか？」
杏子は、首を横に振って
「いいや～。　ワラシの友達が3人程ね～」
すると、彰檎は、
「僕も参加していいんですか？。　向こうに行ってましょうか？」
すると、杏子はスッと彰檎を真顔で見た。
「なんでよ、可愛い従姉弟を見せびらかしたるのに～、彰檎君が半分は主役だぞ」
「は…はぁ～」
「‘はぁ～’じゃ無いッスよ彰檎君、一発ピアノでも弾いて御覧なさい、来るの女性ばかりだから、みんなメロメロですよ～」
すると、彰檎は困った顔で、
「はぁ～、でもピアノは趣味程度ですし、人に聞かせる程では…」

杏子は、テーブルをいきなり‘バン！’と叩き

「安心せい、君の腕なら金取れる。　うん、マジで」

「はっ・はい…」

彰檎は、勢いに押されて頷いた。

さて、昼間にケーキは届いた。

杏子は、彰檎を連れて近くの高級スーパーへ

「おしっ、買うど」

気合いの杏子

「一応、必要な物はメモしましたよ～」

と、彰檎。

対象的な二人である。

彰檎は、ハーフコートにジーンズ、杏子はブランド物の白いロングコートに、セーターとジーンズで、スッキリしている。　遠目から見たらまさに姉弟の様に見える。

杏子は、思い付きでキャビアだの、スモークサーモンだのと買う

一方、彰檎は杏子の買う物に合わせて、パンを買ったり、野菜を買ったりする。

彰檎が自然に息を合わせている。

「さて、後は酒じゃ～」

杏子は、ワインコーナーから、高いワインを5・6本持って来る。

すると、彰檎はカートをワインコーナーに持って行く

「彰檎君、お酒買ったよ～」

「いえ、これだとバランス悪いですよ。　白1・2本買い増しましょう。」

「へ？。　バランス？…君は、高校生じゃ無かったっけ？」

彰檎は、ワインを品定めしつつ

「僕は父の顔は知りませんが、母が言うには昔ながらのの名家出のソムリエだったらしいです。　母と結婚する気だったらしいのですが、家の言い成りでの結婚を言い渡されて、母が身を引いたらしいです。」

「へ～、悲恋ね～」

杏子は、しんみりと聴く。

「ま、母がワイン好きだったし、父に自然と対抗してかワインを勉強したんですよ」

「……、君は苦労してるのね～」

「苦労したのは、母ですね。　僕は、母のお陰でお金が無かっただけで苦労なんてしてませんよ」

「偉い。　チミは偉い」

杏子は深々と頷いた。　なんとさっぱりしたモノか、聴く杏子は嫌みが無かったから尚更感心した。

２４日の夜

「こんばんは～！！！！！」

杏子のマンションのドアを開き、女性の複数の声が響く。

「おう！、よく来た！」

と、杏子

まず

「呼んでくれてありがとう～ね」

茶髪の渋谷に居そうなお姉さんが入る。

紫色のストッキングに、ヒョウ柄の短いスカート。　上はタイトなセーターに、ロングのダウンジャケットなこの女性は、杏子の同級生の春海(はるみ)

次に、

「こんばんは～、お久しぶり～」

と、ホンワカ口調で入って来たのが、恵理(えり)。　杏子の仕事仲間だった女性で、結婚して退職したとか。

最後に、

「さぶい、さぶい、お招きありがとう～、お邪魔します」

と、入ってドアを閉めた女性が茜(あかね)と言って、杏子とは大学の後輩に成る。

三人は、中に入って彰檎を見るなり、いきなり近寄って来る

「うは、マジ可愛い～」

「杏子さんの従姉弟なの～、可愛い～」

「へ～、先輩と同棲してんの?、勇気有る若者だわ～」

と、それぞれ。

杏子は、ワイングラスを運びつつ、

「茜、意味を説明願いたいね」

と、仁王立ちに。

茜は、上着のコートを脱いで、

「だってさ～、大学の頃から友人のストーカーを、拳で撃退したり～、痴漢を回し蹴りで地べたに這わせた杏子と同棲なんて～」

茜は、杏子の過去を一気に言ってしまう。

彰檎は、ハッと杏子を見る

「凄い…武勇伝だ」

杏子は、彰檎を見て、

「大丈夫よ～、彰檎君をぶったりしないから」

すると、春海は

「甘やかしてるな～、別れた旦那で懲りたんじゃ無いの？」

杏子は、眼を細めて、

「あんなんと、彰檎君を一緒にすな。　月と鼈の差があるわい」

恵理は、彰檎を覗き込んで、

「肌白いし可愛い～し、杏子さんと並ぶと姉弟みたいね～」

杏子は、ニコニコと

「それいいわね、彰檎君、今からお姉さんって呼ぶ？」

「えっ？　あっ、あぁ」

こうして、このテンションのままに、飲み会じみたパーティーは始まった。

三人は、あまり彰橋の過去には触れず、杏子の事や自分達の近況を話題に盛り上がった。

彰橋は、ホストみたいに四人の聴き手に回って、話を聴いていた。

良く解った事は、杏子が面倒見が良く、しかも武勇伝の塊だった事だ。

しかしながら、四人は良く呑む。　そして食べる。　彰橋が杏子とかなりの料理を用意したのに、みるみるうちにに皿が空になって行く。

クラッカーが鳴り、部屋がテープだらけに成ったり、サンタの変装メガネやら、トナカイの被り物が飛び出しボルテージは最高潮へ

そして、杏子のリクエストで彰橋は四人の為に、【月光】・【ｍｅｒｒｙ　Ｘｍａ】・【第九】などを弾いた。

「ほぇ～……」

「凄い上手い…」

「感動……」

三人とも、彰檎のピアノにうっとりしてしまった。

ワイングラス片手に、彰檎を見ている杏子が、酔いもあってか彰檎には一番綺麗に見えた。

喋り、呑んで、かなり用意した料理はほぼ空になる。

杏子は、酔っ払い。

「おしっ、全員泊まってけ、みんなで一緒に寝よう！！！　もちろん彰檎君も一緒らろ～」

「えっ！？　僕もっ！！？」

すると、１１時頃に成る時計を見て、三人は辞退を申し出る。

「なんれら～、泊まっていけばいいじゃんか～」

茜は、ニコニコして、

「明日はデートで～す。　浮気はしませーん」

恵理も、頷いて。

「杏子さ～ん、ウチの旦那から帰りなさいのラブコールで～しゅ、新婚なんで頑張ります～」

春海は、羨ましそうに恵理を横目で睨みつけ

「ちっ、イチャイチャして、帰って言えっ！」

と言ってから、杏子に

「泊まりたいけど、子供を親に預けてるからゴメン。　今度は、子供と来るよ」

「ふぎ～、ま～彰檎君居るからいいわい」

と、杏子は飲み過ぎから潰れる様にテーブルの上に伸びる

三人は、笑顔で酔いながら玄関に、彰檎は女性だから心配になり駅が近いながらも、外まで見送りに。

「ありがとう～」

「本当にいい男だわ～」

「このまま、ウチ来る？」

などと言われつつ、エレベーターへ

四人がエレベーターに乗った…

すると、いきなり春海は彰檎に問い掛けた

「ね、君は杏子の事、どう思う？」

驚いたのは、彰檎だ

見れば、年上の女性三人が自分を見ている。　意外に、酔い顔ながら、真面目な面持ちだ。

「は…はぁ、どうと言われても…、感謝はしてますし…優しいお姉さんだと…」

ロビーに降りて、外に向かう。　杏子のマンションは、自由ヶ丘の駅から徒歩5分と無い場所だから、意外と道路などは人通りが有る。

歩きながら恵理は、

「杏子はね～、離婚してから男み～んな嫌ってたんだよ～、旦那さんから暴力や暴言言われて、男がだ～い嫌いって」

彰檎は、少し顔を下向いて、

「杏子さんに…暴力…あんなに優しい杏子さんに…」

すると、茜は彰檎に

「君は、今、唯一杏子の近くで好かれてる男なんだよ。　杏子、大事にしてあげてね。　傷…付けないでね」

彰檎は、ぱっと三人を見て、

「き・杏子さんを泣かせなんかしませんよ。　泣かす前に、泣かされますよ」

「ぷっ」

三人は、一気に笑い出した。

春海は、手を振って、

「泣かされないように、頑張ってね～」

恵理は、メガネを直して、白い息を吐いて笑っている。

茜は、彰檎に寄って

「杏子を守ってね、意外に弱い所有るから、じゃね～」

三人は、駅の方に向かって歩いて行った。

彰檎は、三人を見送ってから、杏子の元に戻った。

「く～…く～…」

杏子は、ワイングラスを手にしたままに、寝ている。

（風邪ひいてたんでしょ？　部屋で寝て下さい）

彰檎は、杏子をベッドに連れて行く事にした。

「杏子さん…杏子さん…ベッドで寝て下さい。　風邪がぶり返しますよ」

と、揺すり起こした。

「ん～彰檎く～ん？」

「杏子さん、ベッドに寝て下さい。　熱上がっちゃいますよ」

「う～ん、めんどくさ～い。　彰檎く～ん、つれてってくだしゃれ～」

「はい、立てますか？」

「うい～」

杏子は、酔い顔でヨロヨロと立ち上がった。

だが、すぐに彰檎が支えないと、倒れてしまいそうだ。

「うわっ、杏子さんしっかり」

彰檎が支えると、杏子は彰檎に抱きつく形になって、

「眠い～、今日はのんじゃいました～」

「はいはい、グラス置いて、ベッドで寝て下さい」

「はぁ～い～」

杏子は、片手を上げて応える

彰檎は、杏子を支えてリビングから廊下に出て、杏子の部屋へ

「はい、部屋ですよ。　　ゆっくりお休みなさい」

と、杏子の部屋の明かりを点ける。

「お～、我がベッドよ～」

杏子は、ベッドに挨拶をする。

「はいはい、ベッドが待ってますよ」

彰檎は、杏子をベッドの上に座らせた。

すると、杏子が…

「彰檎く～ん、こっち～」

と、手招きを。

「？、何ですか」

と、彰檎が近づいたら…

いきなり、杏子が彰檎を引っ張って、二人が抱き合う形になる

「うわっ、きっ・きき杏子さんっ！」

慌てる彰檎に、杏子は、大人びた何時もの杏子に戻っていて

「楽しかった…ありがとう」

と、言って、彰檎の唇を優しい舌使いで舐めた。

「……」

固まって、止まる彰檎に杏子は、

「彰檎、甘えたい時は言ってね。　お母さんに成る気は無いけど、一応アタシも女だから…」

杏子は、そう言って彰檎から離れると、ベッドに寝ようと布団に入る。

「……」

彰檎は、無言のままに立っただけだ。

寝た杏子は、立った彰檎に向かって、

「なんなら一緒に寝る？」

彰檎は、ハッと我に返って、

「いっいえっ！　お休みなさい！」

と部屋から飛び出して行った。

杏子は、その姿を見て、

（可愛いな～、彰檎君を食べちゃおうかな～）

と、笑って眠りについた。

31日の二人…その1

12月31日

大晦日

彰檎が、ベッドで寝ている。

「ん…」

窓から朝陽が洩れて居る。　…と、眼を開けた時だ。

（あれ、右側に誰か…）

視界の右側に、何やら人らしき姿が…

「う゛…き・杏子さん？」

見れば、従姉弟の杏子の顔がある。

「よっ、おはよ～」

彰檎は身を起こして、

「何…してるんです？」

杏子は、ニタニタして。

「可愛い従姉弟を誘って、暮れの買い出し行こうと思ってねん」

最近の杏子は、彰檎に対しての口調が変わっている。　どうも、お姉さんみたいな、変わっている。

彰檎は、シャッキリした杏子を見た事は有るし、仕事に出掛ける杏子は凛てしている。

なのに…今と来たら…

「彰檎君、何やらかすか？　鋤焼き…水炊き…しゃぶしゃぶ…」

「どれだけ食べるんです？　一応、夜中に明治神宮行くんでしょ？。」

「うんだ。　一応は、年越しそばと、雑煮の用意もせにゃ～」

彰檎は、自分の言った意味が通じて無い事が疲れて、頭を押さえる。

実は、杏子は天性的に大食いの才能があり、食べようと思えば、かなりイケる口らしい。

彰檎は、怪物じみた美人の従姉弟に

（凄い人だ…）

呆れるしか無かった。

二人して、良く晴れた寒い朝9時過ぎに、近くのスーパーに買い物へ

結局、年越しの料理は鋤焼きになり、1日は年越しそば、注文のお節料理、2日は焼き肉と言い張る杏子が、材料を買い切った。

（凄い…凄過ぎる…今にして吐き気がしそうなレベルだ…）

彰檎は、二人で持ちきらない買い物に疲れを超えて眩暈が起きそうだった。

さて、杏子の提案で1キロ無い道のりをタクシーで

マンションに荷物を持ち込むのに2往復もした彰檎だった。

「杏子さん、2日の材料は2日でいいんじゃないかな～。　あの店、2日も3日も営業してたよ」

「え〝？」

チラシに飛び付く杏子は、三が日営業の文字に。

「あ〝、マジだわ」

彰檎は、直ぐに冷蔵庫に入れる物と、今日食べる物を分け始めて、

「杏子さん」

「ん？」

杏子は、無駄なエネルギーを使った事にダメージを受けたまんまの顔で彰檎をみる。

「あ…いや…またクリスマスみたいに…人を呼ぶのかな～と…」

すると、杏子は口をへの字にして、

「ふん、呼ばん」

「そうなんですか？」

すると、杏子は彰檎ににじり寄って、

「男は嫌いだから呼びたくない、女はみんな彼氏か家族で過すとさ」

「なるほど、杏子さんは帰らないんですか？　御実家に？」

「今年は帰らない」

と、杏子は荷物を見て回る。

すると、彰檎は、

「僕なら、一人でも留守番くらいは出来ますよ」

杏子は、買い物袋から顔を上げると、

「淋しい事言わないでよ。　彰檎君の為じゃない、彰檎君と居たいのよ～」

「はぁ…」

「大体さ。　去年もその前も、実家に帰れば、子供がど～だの、旦那がど～だの言われるし。　帰れば旦那にキレられるし、セックス強引でおもちゃにされるし、正月なんか楽しい事在りゃしなかった。　彰檎君なら、一緒に居てくれるし、暴力振るわんし、うるさくないし、買い物とか付き合ってくれるし、楽しいもんね。　だから、帰らない」

杏子は、そう言って袋をまた見る。

彰檎は、杏子の別れた旦那が解らなかった。

（こんないい女性をなんでそんな事しかしないんだろう…）

彰檎も、袋を見て仕分けし始めた。

しかし、彰檎はふと疑問が湧いた。

「杏子さん……僕も男ですが……やっぱり弱いから安全なんですか？」

素朴な疑問だった。

すると…杏子は困った笑い顔で彰檎を見つめて、

「なんでそんな風に思ったの？、一緒に居るの嫌かな？」

彰檎は、びっくりして首を左右に激しく振って、

「ちっ・違います。　ただ…男の僕が嫌われ無いって云う理由が気になって…」

若い彰檎は、いきなり悄げてしまう。

杏子は、そんな彰檎がふとまた好きになった。

「ま～ね～。　確かに弱く見えるし、襲われても勝てるからそう思われても仕方ないかな～」

「やっ…やっぱり」

下を向いて頷いた彰檎に、杏子は微笑んだ。

「彰檎君、アタシは実際はそんな理由で彰檎君を安心して見て無いよ。　彰檎君は従姉弟って事もあるし、何より優しいから好きなんだよね。　可愛いし、撫で撫でしてあげよか？」

「え゛？　いっいえ！」

彰檎は、顔を真っ赤にして拒否するが…。

「遠慮はいらないぞ、さっ、撫で撫でしてあげよう」

杏子は、面白半分で彰檎に組み付いて、彰檎を撫で回す。

彰檎は、困った顔で真っ赤になり、

「もっ・もういいですっ！」

と、もがいていた。

そこへ、電話が…

「ちっ、従姉弟の幼気な関わりを邪魔する不届きな電話めっ」

杏子は、仕方なさそうに彰橋を離して、電話に向かう。

「はふ」

杏子の胸に顔をムニュムニュとぶつかっていた彰橋は、九死に一生を得た感じであった。

「はい、もしもし樋川ですが…」

「もしもし、宮木です。　ご無沙汰しております」

「あら、どうも。　どうしたの」

電話の相手は、会社の若い部長の宮木てまある。　杏子は、大して親しくも無い宮木が電話してきた事に微妙な雰囲気を覚えた。

「いえ、今夜から明日に掛けて、一緒にパーティーでも行きませんか？　六本木に、いい店がありまして、年越ししてからはお詣りでも。　如何ですか？」

（な〝なんでそうなんのよ、アンタと過ごしたかないわよ…）

杏子は、宮木の申し込みに嫌悪感を覚え、

「あ～、結構です。　先約有りますから、私なんかより、他の若い子誘ってあげて、じゃね」

宮木は、声色を少し低くして、

「他にお相手がいらっしゃる訳ですか」

「そうね。　そんな所かしら、今のところ男性とどうこうは考えて無いわ。　貴方とも会社の同僚って云う仲間でいいと思ってるし」

宮木は、ため息を一つして、

「そうですか…失礼致しました」

「はい」

杏子は、そう言って電話を切った。

彰橋は、見たことの無い杏子の電話対応に驚いてしまった。

「どうしたの？　男の人だったの？」

杏子は、頷いて、

「そ、会社の同僚で、部長の宮木君よ」

「予定有るって…今日の事ですか？」

彰檎は、少し遠慮がちに聞いた。

杏子は、買って来た荷物の元に戻りつつ、

「そ、仕事出来て～、カッコ良くて～、お金持ちで～、女性にモテるウチの会社のエースですな～」

彰檎は、杏子がヤケにあっけらかんと言うのが気になって…

「杏子さんは、その人嫌いなんですね」

すると…

「多分ね」

「…」

彰檎は、袋の中身の仕分けをし始める。

すると、杏子も…

だが、杏子はしながらに、

「彼…宮木君はね…」

「え？」

彰檎は、ぱっと顔を上げる。　彰檎の見た杏子は、寂しい顔だった。

「彼は、私を好きみたい。　いえ、好きって云うよりステータス的に自分に相応しいって思ってるみたい」

「す・ステータス…？」

「うん…彼は凄く…別れた旦那に似てくるわ。　自分の地位やステータスに見合う相手を選ぶの、女性も話し相手も服やアクセも…仕事もね」

「なんか…悲しいね」

「そう…彼と付き合った娘、多いのよ。　でも、みんな乗り換えで捨てられてる…私はアクセじゃ無いっつ〜の」

「…」

彰檎は、仕分けを淡々とする。

杏子は、ピタリと手を止めて、

「彰檎君は、その点は優しいよね。　人は差別しないし…物事の見方が広くて」

「母の影響ですかね…住んでた所も、色々な人ばかりいたし…助けて貰ってばかりだったし…」

「そっか…やっぱり彰檎はいい子や～、もっと撫で撫でしてあげよか？」

「もっもういいです」

杏子は、急に顔を真っ赤に変える彰檎をわきわきした瞳で見つめて、

「遠慮は要らんぜを」

「はっ早く支度しないと…鍋が遅れますよっ」

「はっ、鋤焼きっ！！」

杏子は、急にスピードが上がった。

31日から年明けのふたり2

31日夜・・・

「う～ん・・・」

「はぁ・・・」

「悩んでもしかたなかんべさ、な、若者よ」

彰檎の肩を、コタツの隣から揉む杏子。

眉間を押さえて、目の前の空になった鍋を見ないようにしている彰檎。　鍋はからっぽ、多分は7・8人前はあったはず。

「彰檎ぉ～、どうせ明日買えばいいじゃんか～、スーパー開いてるしぃ～」

「はぁ～・・・ですが、明日の雑煮と、夜中の年越し蕎麦の材料を食べるとおもってなかったので・・・」

少し酔っている杏子は、カクテルの入ったグラスを空けて、

「んなら～、初詣ついでにどっかで食べよ～」

「はぁ～」

「オラ、男だろ～ショッパイ顔すんなや～」

彰檎は、少しだけ杏子の別れた人に同情した。

杏子は、テレビを消して、ダウンジャケットを取りに、彰檎は黒いコートを取りにいった。

二人がマンションを出て、電車に乗って乗り継ぐこと３０分・・・

「う〝え～、人凄いね、彰檎君」

「最寄駅ですからね、初詣ですし、・・・でも凄いや」

明治神宮前の駅は、もう客で溢れていた。電車も満員なら、ホームも満員。　酔った客が多く目立ち、若者や恋人や家族連ればかりが目立つ。

「カップルがベタベタしてやがるな～、彰檎君、負けてられね～べ」

「勝ってどうするんですか、従姉弟ですよ・・・我々は・・・」

「ま、言わなきゃ年の差カップルだよ。　見得くらいはりまっせ」

「良く解りません」

彰檎は、ほろ酔いの杏子が、言う事が良く解らなかったが、ただ、ちょっと可愛くも見えた。

地上へ出て、行列の中を続いて行く。　南参道から入り、警備員の立つ道を寒い中歩く。　人の数が多すぎて、前に進むのがまどろっこい。　吐く息が白く、冷え込みのきつさを語っている。

「杏子さん、寒くないですか？　一応、マフラーと、掛けるヤツ持ってきましたけど」

「うい～、サンクス彰檎君、首さびぃ～っすよ」

杏子は、マフラーを貰って首に巻いた。

そのとき、若い女子達の集団が、後ろにいて。　一人が、軽く杏子に当たった。

「すいません」

謝る若い女の子に、杏子はスッと後ろを向くと。

「いいえ、混んでるから」

と、大人の杏子を魅せる。　女性らしく、大人らしく、彰檎に見せる杏子とは豪い違いである。

「はい」

若い女の子の方が、その格好良さに身を正した程だ。

彰檎は、それを横目で見つつ、呆れ返ってしまった。

「外の杏子さんに代わるの早いですね・・・」

「建前じゃ、建前じゃ、人前じゃ、うひひひ・・・」

小声で、言う杏子を横に、彰檎は呆れて後ろの若い女の子達に聞か

れてないことを確かめたのである。

さて、午前1時半過ぎに、二人はやっと参拝を済ませて、折り返しに入った。

「う〝え〝〜い、腰痛い・・・」

腰を摩る杏子

「賽銭を遠くに投げようとして腰痛ですか〜？」

「いや〜ん、後ろの破魔矢の先が、バックしたときに当たった」

（アホだ・・・）

彰檎は、疲れて言葉も出ない。

「け〜るべ」

「じゃ、帰りにコンビニに行きましょうか、三が日限定のお蕎麦商品がいっぱいでしたよ」

いきなり人ごみの中で、シャッキリする杏子

「うむ、今しかない商品求めて、コンビニ巡りすっか」

「・・・ウソ・・・」

彰檎は、本気かと聞きたくなった。

その時・・・

「あ～、やっぱり先輩だ～、樋川先輩！」

いきなり、後ろから呼ぶ声が、

「ん？」

振り返る杏子と彰檎の目の前に、参拝客を掻き分けて、４・５人の男女が。

「あら、みんなも参拝かな？　明けましておめでとうございます」

杏子が、スッと会社員のスタイルに戻った。

「は～い、明けましておめでと～で～す。」

「おめでとうございます～、みんなでパーティーやった帰りで～す」

彰檎も含め、それぞれが年明けのご挨拶を交わす。

若い女子社員3人と、若手の男子社員が一人、もう一人は事務の中年の男性社員であった。

事務の男性は、彰檎を見るなり、

「樋川さんも、隅に置けないね～。　こんな若いカレシ連れて」

と、ややオジサンっぽい言い方で、杏子を見る。

すると、杏子は魅惑的に微笑んで、

「私も女だから、年越しは男と過ごすのよ」

と、女っぽく言う。

彰檎は、もう遠くを見つつ。

（凄い見得じゃないですかね～、僕がカレシですか・・・男版のメイドみたいなもんですけどね～）

「やだ、事務部長、この人は樋川先輩の従姉弟さんですよ」

「そうですよ、一人になってしまったんで、面倒看てあげてるんですよ」

と、教える。　二人は、遠慮してか小声で言う。

彰檎を見た杏子だが、彰檎は普通のまんま、気にするところも無かった。

「ほ～、従姉弟さんか～。　いや、しかし、ま～いい男だね～、二人で居ると似合いの恋人みたいだ」

すると、杏子は、スッと彰檎の腕を掴んで、

「でしょ？　養って、唾付けとこうと思ってね」

一斉に笑いが生じた、笑ってないのは賞後だけ。

（ペットかな、お手伝い犬みたいな・・・）

「んじゃ、またね。　コンビニ巡りに行くから、皆さん良いお年を」

「は～い、もう一飲みしていきま～す」

若い社員達は、元気であった。　杏子と彰橋は元来た道を、同僚達は破魔矢などが売られているところへと別れた。

「ふ～、凄いぐ～ぜんだなこりゃ」

別れて、杏子は星の瞬く空を仰ぐ。

「わん」

「ん？」

彰橋が、可愛い犬の物まねをするので、杏子は声の方を向く。

「何？、今の？」

「犬です、養われてる」

「・・・いじけたのか～？」

「いえ、テンションです」

「ほ～」

杏子は、目を細めて彰橋を見て、ニヤニヤすると。

「可愛い犬だべさ、一緒にお風呂でも入れてやろうかな」

彰檎は、パッと真顔になって、

「止めてくださいよ、怖いです」

「怖がることないない、アタシは何ももってないから」

「ふ～・・・それが怖いです」

彰檎は、コートを正してそう言った。

帰り、渋谷で2軒、自由が丘で3軒、計5店ほどコンビニを回り・・・

「う゛～、重いなあ゛～」

「買いすぎ・・・ですね」

二人して、買い物袋を両手に4つ持っている。　コンビニで、買い物で5万も6万も中々ない事だ。　正直、杏子も普段は節約する方なのだ。　しかし、イベントになると、気が緩むらしい。

「うお～、こりゃ～体力使う、帰って、お蕎麦ガンガン食べよ」

（・・・さっきの鋤焼き・・・もう消化したんですか？）

彰檎は、横の底なし胃を持つお姉さんに、鳥肌が立った。

そんなこんなで、気が立って寝られる訳も無く、彰檎も付き合う中で、深夜テレビ番組でお笑いを見つつ、彰檎は杏子の世話をしたり、テレビを見たりとフツーの年越しをして、朝方に眠りに付くことと成る。

寝る前に、杏子に強請られてピアノで、バッハ「アンナ・マクダレーナ」「小フーガ」。　シューベルト「ピアノのためのファンタジア第2番」他を弾いてあげる。

杏子が、ピアノの縁で、眠ろうとすると、彰檎は手を止めて。

「さ、杏子さん、もう寝ましょう」

「彰檎くん、連れてって・・」

「はいはい」

彰檎に、寄りかかりつつベットに向かう杏子は、

「私・・・こんな年越し初めてだわ・・・田舎出てから」

「・・・楽しくなかったんですか？」

「ううん、ワイワイしかしてこなかった。　一人とかでゆっくり過ごすと、寂しく思えるから。　結婚したらしたで、見得の為にパーティー連れて行かれたり、堅苦しい挨拶とゴージャスなだけの形お正月だもの・・・今日が一番楽しいお正月・・・かも」

「女性も大変ですね。　母も言ってました」

[年越しも何にも無かった・・・彰檎が居るようになってから、お正月が、お正月らしくなった]

「って」

「そっか・・・お母さん商売上で忙しかったのかもね」

部屋に入って、ベットに座る杏子は、廊下の明かりで見える彰檎に微笑み。

「君は、女を幸せにする男だね、楽しかったぜ、若者よ」

「はぁ～、どっちかと言うと、勝手に楽しんでるみたいですけどね」

彰檎も、笑って言う。

その顔、なんと安らかな笑顔だろうか。　杏子は、なんだか愛おしく思える。

「ほい！、寝る前に抱っこしてあげよ～か」

両手を広げる杏子

「あの～・・・もう１８なんですけど・・・」

「いいじゃないか、１８だろうが、３０だろうが、６０だろうが」

「無理やりじゃありません？」

「我儘な若者だ」

杏子は、彰橋に抱きついて

「わっ」

「捕まえた」

「き・杏子さん、もう寝ましょうよ～」

「一緒にねるか～」

「マズイですよ～」

「良いでは無いか、良いでは無いか～」

杏子にたらふく可愛がられて、疲れた彰橋であった。

正月明けの事件

正月が過ぎ

1月6日、杏子は彰檎と二人でケータイを買いに出掛けていた。

あからさまに、彰檎のケータイが古すぎるので、杏子が新しいのをと言ったのだ。

秋葉原の駅前にどど～んと店を構えるビックカメラに行き。　二人して機種豊富な売り場にて、品物を見回っていた。

「彰檎君、こっちにしよか？」

長い髪をそのままに、タイトなロングスカートとブラウスに上着とコート。　今日の杏子は大人っぽい。　時々、チラッとすれ違う会社員の男性が横目を遣う。

「いえ、安いヤツで構いませんよ」

彰檎は、少し長めの前髪を無造作にして、ほんのりした何時もの姿。
　しかし、すれ違う若い女の子がチラチラと見たりしている。

彰檎の美少年さは、ボロを纏っても王子様に見える様ならしい。

端から見れば、やはり年の差カップルか、姉弟か、分かりにくい。

「彰檎君、若いのに、安いヤツ，だなんて言ったらイケんよ」

「いえ、お金掛からない方が…」

すると、杏子は最新の色違いを指差し、

「これでいこ～。　同じなら、教えて貰えるし解りやすい」

彰檎は、目を瞑り。

（使い方は、どれも似たような物だと思います。　楽なヤツなら、‘らくらくケータイ’ので十分かと…）

負けず嫌いな所のある杏子に言える訳も無かった。

機種変更の手続きをして、時間を待たないといけなかったから、杏子は彰檎を連れて、ゲームコーナーやパソコンコーナーを回った。

その時だ。

「あれ～、御繰じゃない？」

いきなり、若い女性の声が…

彰檎と杏子が見ると、ピンクのストッキングに、ヒョウ柄の短いスカートを穿いた渋谷に居そうな若い女性と、可愛い感じの黒いジャケットに、やや短いスカートとベレー帽子を被った女の子らしい二人連れがこっちを見ていた。

「こんにちは」

彰檎は、そのまんまの何時もの挨拶。
「お友達かな？」
杏子が言えば。
「同級生です」
「ほ～」
すると、二人も彰檎の前に来た。
「へ～。　御繰が年上とデートかよ」
ヒョウ柄のスカートを穿いた女性が言えば。
「御繰君、お友達？」
と、もう一方の女の子も、
「僕の従姉弟のお姉さん、今、お姉さんの家に住んでるから」
「うわ、御繰んチ大変だね。　でも、お姉さんキレイだしマジカップルみてぇ～じゃん」
派手な格好の同級生が言えば。
「本当だ…あ、はじめまして」
と、もう一人の女の子も、杏子に挨拶を。

「こんにちは、彰檎君の同級生か。　よろしくね」

杏子は、余所行きの大人モードで挨拶すれば、

「うわ、マジかっこいい」

「こんにちは、同級生です」

二人と杏子も挨拶を。　やはり、杏子が大人な女性に見えるのだろう。　二人とも、少し緊張した感じで答える。

二人の視線、二人の仕草、杏子は明らかに彰檎に大して好意が有る事を見抜いた。

しかしながら、彰檎は受け答えをするだけだった。

「んじゃ、御繰またね」

「明後日、学校始まるね。　勉強教えてね」

二人は、別の店に行くらしい事を言った。

「はい、また」

彰檎も、普通に少しだけ笑って二人を見送った。

杏子は、二人が居なくなってから、彰檎に近づき。

「ムフフ、彰檎君」

「なっ・なんですか？」

彰檎は、杏子が不気味に微笑んで近寄るので、ちょっと引いてしまった。

「君（チミ）も罪な男の子だね～。　あんな可愛い女の子に好かれてさ～、彼女とか居ないのか？　おい」

喋りっぷりは、何処かの酔っ払ったオッサンか。

「彼女だなんてっ」

彰檎は、顔を赤らめて首を振る。

杏子は、彰檎に顔を更に近づけて。

「あの今のお二人さん、完全に彰檎君に気が有ったべさ、本当は彼女何人も居るんと違いますか～？　え？　うひひひ」

杏子に完全に制圧され掛かっていた彰檎で有った。

ケータイを受け取って、いざ二人でＭａｃに寄り、ケータイのデータ入力をし始めるのだが…。

「…解らん。　タッチパネルの表示が…」

（嘘…使い勝手良くて見易くて解りやすいって言ったじゃん…）

彰檎は、ケータイと睨めっこしている杏子に心の中で突っ込んだ。

仕方無く、彰檎は杏子に手を貸してやり、杏子は大喜びで有った。

1月8日

彰檎は僅かな日数の学校へ出掛けて行った。

杏子も、仕事へ

杏子は、5日に仕事始めが有った。　午前中での仕事だった。

だから、今日が本当の仕事の始まりだろう。

その日の夕方

帰る支度の杏子は、若い社員達と今日のお客様対応について話ながらだった。

「いい。　サービスって、仕事じゃ無いよ。　気持ちの問題なの、仕事を来た人に対応してやっただけなら、サービスしたんじゃなくて仕事しただけなの。　仕事をやっている間、どれだけお客様の事を思ったか。　思ってどんなアドバイスをしたか、必要性の有るアドバイスを出来たか、出来無かったか。　それが、出来高に繋がるのよ～」

「樋川さん、難しいですよ」

と、明治神宮のお参りに来ていた若い男の社員が言う。

しかし、杏子はきっぱりと、

「難しいか、難しく無いかの前、みんな考えた？」

全員が沈黙する。

「しっかり、言え無いのは考えて無いと言われても仕方無しよ～、みんな今日のクレームは忘れない方がいいわ。　これから、サービスする仕事に就く限り当たる壁よ～」

杏子は、こうゆう所はハッキリしている。

「はい…」

困る社員達

杏子は、笑って言う。

「この問題に、算数みたいな答え無いわよ。　体と頭で覚え込んで行くのよ。　悩むのはいい事よ～」

杏子は、手をヒラヒラさせて、先に帰った。

６時過ぎにはウチに帰ったか。

「ただいも～、彰檎く～ん」

明かりの点いた玄関で、景気のいい挨拶を飛ばす杏子。

「お帰りなさい、お風呂沸いてます」

何時もの彰檎の声…の様でちょっと違った。　トーンが低く、少

しこもっていた。

「ん？」

杏子は、キッチンにいるジーンズ・セーター姿の彰檎を見て驚いた。

「ちっ・ちょちょちょっとっ！！　どうしたのその顔っ！！」

明らかに殴られた跡が顔に、唇と額を切っていた。

「なんでも無いよ。　勘違いで殴られました。　さっき、親の方が謝りに…」

彰檎は、２個程の菓子箱が置いてあるのを指差した。

「はっ！！？　何よそれっ！！？」

もう杏子の動転ぶりは凄い物だった。

話によると、彰檎が６日に秋葉原のビックカメラで会った二人の女の子は同級生な訳だが。　二人して彼氏が居たらしい。

しかし、その二人共、彼氏に別れ話を切り出していたらしい。

「へ？　別れ…話？」

しかし、いきなりの話だ、男の方も寝耳に水だった様で、怒ったらしい。

片方が、別の仲間から彰檎と秋葉原で会っていたらしいと聞いて、

勘違いしたらしい。

「なんじゃそりゃーーーっ！！！　傷害やんけっ！！」

「うん、だね」

「彰檎君っ！！　‘うん’じゃないでしょうっ！！」

杏子の怒りは、頂点に近い。

彰檎をコタツに座らせて、イライラした顔まんまに怒声を放っていた。

彰檎は、電話を掛けるとキレる杏子をなんとか宥めていると…其処にＴＥＬが…。

「アタシが出るっ」

「はぁ…」

心配した顔の彰檎の予感は、見事に的中した。

電話に出る杏子は、相手が殴った相手と解るや、

「何が‘スミマセン’だっ！！！　自分の従姉弟に怪我させておいて菓子箱一つだとっ！！」

「きっ杏子さんっ」

彰檎も察して止めに入ったが、もう遅い。

杏子は、相手の男の子を平謝りさせ、再度親を出させて、怒った。

１時間は怒ったか。

ＴＥＬは切ったが、まだ怒り治まらない様だった。

１０時過ぎて、やっと二人は遅い食事を。

彰檎は、苦笑いで

「杏子さん、怒ると怖いですね」

「あったりまえでしょっ！！　可愛い従姉弟を怪我させられて、これが黙っていられるかっ…口痛く無い？」

「大丈夫です。　少し沁みるだけです」

「全くっ！！、あたしゃびっくりしたよっ」

口調が自然と荒くなる。

「スミマセン、ごめんなさい」

「彰檎君の所為じゃ無い」

杏子は、ぴしゃりとと言って、味噌汁を飲むが、どうにも怒りが収まらない様で…。

「ったく、殴るだぁ？　　アタシが殴り返したろ～か…」

と、ボヤく。

彰檎は、杏子が此処まで自分の事を心配しているとは思わなかった…。

「ごめんなさい…心配ありがとうございます」

いきなりだったから、杏子もキョトンとしてしまう。

「えっ？　　あっいいのよ謝んないで…お礼は…貰っておくわ…」

彰檎は、杏子に正月の残りのワインを注いで出すと、ピアノの元に読んだ。

「今日は…一曲だけです」

と、ヘンデルの【私を泣かせてください】を。

不思議なものだ、杏子はゆっくりとピアノを聴いているだけで、直ぐに気持ちが落ち着いて来た。

（不思議なメロディー…彰檎君が弾くだけで、優しく穏やかに聴こえる…）

杏子の心は、ゆったりと解れて行った…。

次の日

「行ってらっしゃい」

杏子を送る彰檎の声、二人はマンションの入り口の外に居る。

銀杏と楓の植木が散る敷地内で、二人駅に向かう前に言い合う。

「いてら～、次に殴られたらアタシが殴ると言っておいてね～」

杏子は、恐ろしい事をケロッと言う。

学校に行く彰檎は、苦笑いが収まらなかった。

鈍い彰檎

1月の終わり…

「ふう～」

マンションの居間にて杏子がため息を付いていた。

コタツに脚を入れて、テーブルに野垂れている。

顔色はあまり優れていない。　カップに入ったコーヒーが冷めている。

杏子がなんで悩むか…他ならぬ彰檎の事である。

（どうしよう…暇な時間に彰檎君が居ないだけで不安になるわ…。
今日で学校が一先ず最後よね…。　後は試験だけ…か）

彰檎と暮らす事ひと月過ぎ、杏子の心の安心材料に彰檎が要る事が不安だった。

最近は、彰檎が自分に対して色々と話す様になり、一人元気に振る舞う事が無くなっただけに、仕事の愚痴や1日の感想を彰檎に話す自分が増えた。

明かに自分の中で彰檎が大きく頼れる存在になりつつあった。

彰檎は相変わらず料理を含む家事は怠らず、友達も少ない所為か、

本を読んだりピアノを弾いたりする事が趣味に成っているから、殆どの暇な時間は家に居る。

それでいて、買い物や杏子の誘いには素直に来るから、杏子としても尚可愛いのだ。

さて、杏子が一人悶々としている休み。　彰檎は、午前中の授業を終えて帰り支度であった。

3階の教室は帰り支度の生徒でざわついている。　みんなセンター試験などの入試等を残しているからか、顔は笑い合っていても不安が見え隠れしている。

其処へ。

「おい、御繰」

彰檎が見れば、同級生の女子生徒が3人いた。

「何？」

澄ました彰檎に、短いスカートの女子生徒が。

「なぁ。　御繰って、今日暇かな？」

「帰って勉強するけど」

もう一人の髪の毛が赤い女子生徒が。

「じゃ、一緒に勉強しない？」

彰檎は、今日は杏子と買い物に行く予定だったので。

「ごめんなさい。　今日は無理です。　義姉さんと買い物に付き合わないといけないから」

すると、始めに言った女子生徒が。

「御繰って、その義姉さんのなんなんだよ。　遣いッパシリか？」

彰檎は、こう言われてもムキになる性格でも無かった。

「さぁ。　ただ、居候させて貰ってるし、学費も出して貰ってるし、貸せる手は貸したいから」

彰檎は、こうゆう所に融通や機転は利かない方だ。　物事には利くが、人の微妙な機微を察するのは鈍い。

女子生徒の一人は、イライラしてしまった。

「御繰、お前ぇ本当はその義姉さんの事好きなんじゃね～の？、すんごくキレーらしいじゃんか」

彰檎は、このあまり話した事も無い女子生徒に、なんでこんなに絡まれるかが良く解らなかった。

「好きとか嫌いとかじゃ無く家族だから…」

「詰まんないヤツっ」

その女子生徒は、そう言って行ってしまう。

他二人の女子生徒は、行った後を見て、

「何キレてるんだろ？」

「さぁ～。　それより御繰君さ～。　試験までに1回でも2回でも勉強しようよ。　一番勉強が出来る御繰君としたいからさ～」

「そうそう、別に二人っきりじゃ無くてイイんだし、みんな集まって勉強とかするから」

彰檎は、普通に。

「うん、構わないよ。　メールアドレス教えようか？」

二人は見合って、

「よしっ」

「やった」

と、小声で言うのが、彰檎にはサッパリだ。

彰檎は、母親と二人三脚で金の無い中で生きて来たから、周りの今時の学生とはどうもズレが在る。

「うわ、御繰君の最新の一番高いヤツじゃん」

「あ、マジだ。　8万くらいするんだよコレ」

彰檎は、二人に携帯を誉められても、あまりどうこう云わず、アドレスを交換すると、カバンを手にして、

「日中は大丈夫だと思う。　　勉強しかしてないから」

「ありがとう～御繰君」

「勉強教えてね～」

彰檎は、一つ頭を下げて、

「サヨナラ、先に失礼します」

まだ残ってる男子生徒の中には、羨ましそうな顔の生徒もいた。

彰檎は、性格的には大人びてるし、余り物事に動じ無い分だけおっとりしているから、時折人に嫌われる事がある。

彰檎は、下駄箱で会った別クラスの生徒と帰った。

午後1時を回り、彰檎がマンションに戻った。

「ただいま」

ぐってりしてた杏子が、パッと体を上げて。

「おかえり～、お疲れ様です」

と、明るい声で返す。

中にあがって、コタツに座っている杏子を見た彰檎は、
「ただいま、もう買い物行きますか？」
「うぃ～す、行きたいっす」
彰檎は、携帯を杏子に見せて、
「杏子さん、この携帯って８万円もするの？」
杏子は、のんべんだらりと彰檎の携帯を見て、
「ンだ。　確かに高い」
「ふぅ～、高いって聞いてたけどそんなにするなんて知らなかった」
「遣いこなせよ若者よ～」
（この機能を遣いこなせなければならない必要性が…）
彰檎は、今日も杏子に呆れていた。
しかし、だ。
「よ～しよし、買い物いこ～」
杏子がコタツからさっさと出て支度に向かう所へ。
「杏子さん、少し女性の事で聞きたい事があります」

いきなりの彰檎の相談に杏子はびっくりして、

「ぶーっ！！」

っと、廊下で滑った。

「しっ彰檎ぐん、じょじょ女性の事って…なに？」

色んな想像が頭に浮かぶ。

「いえ、今日に女子生徒に絡まれたんですが。　理由が良く解らなくて」

言った彰檎の目の前に、土偶の様に目を平たくした杏子が近く。

「ぬわにが有った～？　またイジメくわ～？」

（凄い…人じゃ無い）

彰檎は、杏子の顔が恐ろしく変わっていたので、

（携帯を遣いこなす意味で写真でも撮ろうかな…）

などと思いつつ、

「いえ、イジメられてはいないのですが。　怒られました」

「何したの？」

「いえ、何も」

「何もしないで怒られたら、その女子生徒がイカレてるだけでしょ？。　ちゃんと話してみなさい」

こうして、彰檎は買い物に行くがてら、杏子に有った事を話す。

「ほ～」

杏子は、意味が解った。

（その女子生徒が彰檎君の事好きで、呼び出したかった訳か…。
今時、珍しい青年だ。　こんな事も解らないとは…）

杏子は、その女子生徒にちょっと同情した。

「う～ん、彰檎君」

「はい？」

何時もの、黒いコートとジーンズの彰檎は、杏子をまじまじと見る。

「アタシとの買い物は夕方でも行けるでしょ。　少しは女の子と一緒に遊んで来なされ」

「はぁ…、でも、同級生って苦手です」

彰檎は、コートのポケットに手を入れたまま、どうも困った様にそう言う。

（う～む。　彰檎君ってこうゆう仕草も可愛い…）

杏子は、ふと彰檎を誰かに渡す事が淋しくなった。

いずれは彰檎だって恋人が出来るだろうし、結婚も…。　だが、それを見ていなければ成らない事が淋し過ぎる。

「じゃ、彰檎君は年上と年下とどっちがイイの？」

杏子は、我ながら意地悪な質問の様な気がする。　なんとなく口から出てしまった。

「う～ん、年上とか年下と言われましても…」

彰檎は、困っていた。

杏子は、彰檎を見て少しじれる気持ちを抑えきれずに。

「多分ね、彰檎君。　今日、君に絡んだ女子生徒さんは、君の事が好きなんだと思う。　誘ったのに、相手にされないってち～と辛いじょ。　ま、恋愛は自由だから、付き合う付き合わないは好き好きだけどさ」

彰檎は、困った顔をそのまま杏子に向けた。

「はぁ、でも僕は今は付き合うとかって無理ですよ。　恋とかあんまりしない方ですし、やり方わかりませんし…自立する為に大学行かせて貰えるならその方が先になります」

杏子は、彰檎をみて困ったちゃんを見つけた気がする。

「彰檎君、勉強も恋愛も人生だよ～。　ま、強引に恋する必要は無いけどね～。　そんな朴訥じゃ女の子が逃げちゃうよ～」

すると…スーパーの前まで来て、彰檎はポツリと言った。

「もし、年下と年上どっちがいいかって言ったら、年上かもしれません。　僕の場合…」

杏子は、彰檎を見た。

（言い過ぎたかな…）

彰檎が、出会った日の暗さを見せる。　やはり、まだまだ母親の面影を追っている様だ。

「ま、彰檎君の場合はそうだろうね、お母さんの影響も在るだろうし」

彰檎は、杏子を見る。

「かもしれません。　ただ、杏子さんみたいな楽しくて大雑把と云うか大らかみたいな感じの人がいいです。　同級生とかって、どうも苦手です」

（え…）

杏子は、彰檎を見返す。

彰檎は、一人先にスーパーに入って行く。

（…それって…アタシでもＯＫって事？）

冬の風が冷たく吹きオレンジ色の傾いた太陽が杏子を照らす。

「どうしました？　杏子さん風邪またひいちゃいますよ」

彰檎の声に、

「え？　あっ、うん」

杏子は、スーパーに入った。

彰檎への手紙

4月1日

彰檎は東京大学工学部に進学を決めていた。

合格発表が通知された日、彰檎の合格を我が事の様に喜んだ杏子。
その日は、友達を呼んで呑めや唄えやの騒ぎにしてしまった。

彰檎も、そんな杏子に感謝していた。

彰檎は、それからと云うもの、他の合格発表を見る仲間に付き合ったり。　合格祝いの集まりに行ったり、でもバイトを探したりと忙しい日々を送った。

しかしながら、4月に入る手前からは、暇に成って家に居ては杏子の為に何時もの様に食事やら家事をする彰檎。

4月1日。

土曜日。　杏子は、午前で仕事を終える。

「お疲れ～、お先に失礼～」

会社を後にする杏子は、帰り道に咲きかけの桜の木を六本木のビルの植木に見つけた。

（あら～、もう桜が咲く季節ね…。　彰檎君が大学生になっちゃんねんね～）

最近のばたばたとした会社の仕事やら、受験の彰檎の事で慌ただしい日々だった杏子。

今日は、彰檎がマンションでのんびりと鋤焼きの用意をしているらしい。

（うし、食うべ～。　スッキヤキだ～、スッキヤキだ～）

杏子は、気合いを入れて、マンションに戻るべく電車に乗った。

杏子がマンションに戻ったのは、夕方3時過ぎだろうか。

1月の彰檎の怪我の一件以来、彰檎と杏子は益々姉弟じみて来て、近所の人達には、

【歳の差姉弟】

と、言われている次第。

だが、杏子の心の底には、姉心半分。　女心半分の微妙な均衡があった…。

さて。

「ただいま～でやんス～。　彰檎君、鋤焼きしよ～」

と、杏子は言って、玄関を…。

すると、キッチンに居た彰檎は、杏子を横目に。

「杏子さん、鋤焼き無しです。　野菜鍋でも、造りますよ」

「い゛っ！？　な゛ん゛でぇ～！？」

杏子は、鋤焼きを楽しみに帰って来たから、泣きそうな顔である。

すると、彰檎は冷蔵庫を差して、

「冷蔵庫に鋤焼き用に買って置いた肉が有りません」

「あ〝……昨日……食べちゃった……」

彰檎は、長ネギを切りつつ。

「アレ、一昨日の特売の肉で高いヤツだったのになぁ～。　昨日、あれほど食べないでと言ったのに…ヤッパリ僕って説得力も無い居候なんですねぇ～」

昨日、彰檎は友人に呼ばれて、合格祝いのお祝いパーティーに行った。　何せ、彰檎と２０人ぐらいの男女は絶えず勉強するために図書館やら、友人の自宅やらに呼ばれたから、合格祝いにも呼ばれる。

何度かは断ってもいたから。　昨日は断れ無かったのだ。

彰檎は、今日の為に肉を取っておいた。　杏子には、湯豆腐を用意しておいたのに、杏子がワインで飲み上がり調子付いて肉を食べてしまったと云う訳だ。

「彰檎君、ゴメンナサイ！！　私が悪う御座いましたっ！」

杏子がうなだれて謝っているのを見て、彰檎はキッチンの奥を指差して、

「ま、一応は新しい肉買って来ましたが、あんまり食べ過ぎも体に

悪いですよ」

杏子は、パッと顔を上げ、

「彰檎センセ、流石に御座いますっ」

と、にこやかに。

すると、彰檎は更に、

「所で、いっぱい郵便物来てましたが。　コタツの上に」

「うい～ッス」

と、その時だ。　杏子の脳裏に、電車の車内にて、今日一日だけの特別な中吊り広告が思い出される。

【4月バカ？　1日だけですよ？　嘘はやっぱりイケません】

飲み過ぎで酔っ払って帰った旦那さんが、Yシャツの香水の匂いで居酒屋に行ったと吐いたウソがバレるシーンの漫画と共に、奥さんにシバかれる…という飲み過ぎに呑む内服薬のCMなのだが…。

杏子は、彰檎の後ろ姿を見て、

（今日はウソ言ってもいい日だわ。　彰檎君に言ってみよ…かな）

「ね。　彰檎君…」

彰檎は、キッチンで調理をしながら、

「はい。　なんですか？」

杏子は、立ち上がりコートを脱いで食卓の上に置くと。

「あのね、彰檎君。　合格祝いじゃ無いけど、私彰檎とキスしたい。　彰檎の事…好きだから」

杏子の声が、大人びた。

すると、彰檎はピタリと手を止めた。

「杏子さん、４月１日だからって、僕の事からかってるでしょう？」

と、呆れ顔で振り返った。

「いひひ…バレたか」

「杏子さん、分かり易いのは致命的ですよ」

笑う杏子と、呆れ笑いの彰檎。　何時も光景だ。

だが、笑いが収まり掛けた時、彰檎は、

「杏子さんならいいかな」

と、ポツリ。

「ん？　今、なんて？」

杏子は、良く聞き取れ無かったから、パッと聞き返す。

彰檎は、くるりと振り返って、

「さ～て、何だったでしょうかね～。　忘れてしまいました」

杏子は、サッと立ち上がって、

「コラっ！　何て言ったんじゃ～」

と、彰檎に絡み着いた。

さて。

鍋の用意をしつつ、杏子は何時もより多い郵便物を確かめ出す。

彰檎は、杏子の居候である事を認識しているのか、郵便物も先に杏子にて確認させる。

だから、合格発表も杏子が確かめたし。

さて、杏子は一通の手紙に釘付けになった。

ー宛名▬御繰彰檎様ー

ー送り主▬華卿院鞠乃介ー

「？　か・きょう…いん？　まりの…すけぇ～！？」

その名前が出た瞬間、キッチンの彰檎の手がピタリと止まった。

前を見た彰檎は、何時もの落ち着きの有る彰檎の顔じゃ無かった。

杏子は彰檎に向かって、

「彰檎君。　お手紙だよ。　華卿院って、凄い名前だね」

すると、彰檎は…。　少しトーンの下がった声を出して。

「それ……今の父の姓名です……」

「え〝ーーーーっ！！！！」

杏子の驚きは、部屋中に響いた。

彰檎は、暗く成ってから鋤焼きを始める中、杏子に華卿院の家の事について、知っている事を話してくれた。

華卿院家は、古くから地主で有り。　名門であったとか。

今は、枝分かれした一族が、政界に出たり、官僚や大会社の顧問をしていたり。

本家の華卿院家は、代々が女血家系で、当主たる男子が生まれる事が少ないらしい。

だから、彰檎の父になる人物は、かなり自由で甘やかされて育ったとか。

彰檎６歳の時、彰檎の母親の元に、この華卿院家の当主である鞠乃

介氏と顧問弁護士が来て、彰檎を引き取りたいと…。

杏子は、

「でも、彰檎君の姓名は御繰…」

「はい。　母の話ですと、父は鞠乃介氏の養子に入って華卿院に…。　当主を継ぐ為にだそうです」

「じっ…じゃ…その継ぐ前が、“御繰”？」

「えぇ、父の母親に当たる人が、鞠乃介氏の一番下の妹に当たるんだとかで…元々と云うか、嫁いだ先が御繰です」

「一応、彰檎君のお母さんとお父さん結婚してたのね」

「父は、離婚して御繰の姓名を母に…。　自分は華卿院家に…法律的にどうかは良く解りません。　ただ、御繰の姓はもう僕だけですね」

鍋に脂と肉を、一枚焼いてから、割り下を入れて、野菜を入れる。

「手紙の内容は、思った通りでしたね」

彰檎は、杏子の為に肉を鍋に…。

手紙では、大学のお金を出すから、華卿院家の養子にと書いてあった。

杏子は、彰檎にハッキリと言った。

「彰檎君の好きにしなさい。　私は、今のままがいいわ。　彰檎君の事、最後まで面倒見るから。　おし、食べよ」

彰檎は、杏子の話に頷いて、そして微笑んだ。

彰檎は、直ぐ返事を書いた。　答えはノー。

今でも忘れていない。　ボロアパートの一室、母親を罵る様に蔑んだ、鞠乃介氏とその弁護士の顔を。

彰檎は、押し入れで隠れて見ていた。　悔しくとも、静かに下を向いて拒んだ母親。

彰檎は、自ら一計を幼いままに考えた。　“バカ”を演じ切ったのだ。

勉強出来ない、忘れ物が多い、注意力が無い。

最初、小学校の低学年では、それだけだ。

しかし、高学年になり社会の仕組みを知りだした彰檎は、中学生の入試や、必要な試験だけを必要なレベルでクリアした。

彰檎が、テストにて東大レベルに点数を上げたのは…高校生になってからだ。

彰檎は、母親から離れない為に、態と出来損ないを演じた。　ピアニストとしての才能を出さなかったのも、その為だ。

母親が死んだ今、彰檎は父の事などどうでもいい。　もう、自分は自分でしかない。

これ以上、父の亡霊に取り憑かれるのは、ごめんだった。

ただ、杏子に迷惑が掛かるのは…嫌だった…。

鋤焼きが終わった後、彰檎は謝った。

「杏子さん…ゴメンナサイね…厄介事持って来たら…」

鋤焼きを片す時に、彰檎が言った言葉。

杏子は、ただ。

「気にすんな、彰檎君が悪い事した訳じゃないからさ～」

杏子の天真爛漫的な態度は、彰檎は正反対なだけに安らげた。

彰檎は、杏子の御強請りに応え、「白鳥の湖」、「ｓｏｎｇ　ｏｆ　ｌｉｆｅ」、「アマデウス」とピアノを弾く。　杏子が、通販にて色々な楽譜のセットを買って、ＴＶや映画の音楽にもバラエティーが広がった。

杏子は、父方に掻き乱され、母方には嫌われていた叔母に同情した。

そして、彰檎に…。

しかし、まさかこれから、二人してお互いに迷惑を掛けあって行く事に成ろうとは…。

――――――お返事――――――

御繰彰檎は、華卿院家に入る気は御座いません。

１２年前、母を侮辱した御当主や、母を捨てた父の元に行く気は有りません。

また、華卿院家と自分に繋がりを誇示する気も有りません。

どうか、私の事はお構い無きにお願い致します。

御繰彰檎より

――――――――――――――――

晴美の子供の誕生日

４月の後半、桜が満開になっている都心の公園や、並木道。　強い風に吹かれて、桜吹雪となって、季節を彩っている。

夜、１１時頃。

「うい～しゅ、たらいま～」

杏子が、酔っ払って帰ってきた。　今日は、新人と共に花見の宴会を上野公園でやったのだ。　金曜日だから、お花見を行った企業のサラリーマンやＯＬが駅や電車内で目立っていた。

だが、帰った杏子は、暗い部屋の中に帰った。　彰檎は、居なかった。

「あり？　しょ～ごくんは・・・どうしたっけ？」

居間とキッチンな仕切りの無い吹き抜け。　明かりを点けて、荷物を食事するテーブルの上に置いた。

「お～い、しょうご～。　かえってきたど～」

声を出し、流しで水をコップに汲んだ。　一気に半分くらい飲んで、それをテーブルに置いた。

「しょ～ご・・・ん？」

テーブルの上に、手紙が有った。

―杏子さんへ―

その下りを見た杏子は、この前来た手紙のことを思い出した。　あの手紙以来、彰橋の様子が少し遠退いたものになった。

（ちょっと・・・まさか）

ハッとして、酔いが醒めた気がする。

―杏子さん、夜食はレンジの中に入れておきます。　ちゃんと温めて下さいね。　バイト先の人が、急に出れなくなったので、交代で行って来ます。　終電にて帰りますから、先にお休みに為って下さい。

彰橋―

「うえ～、な～んだ・・・まじっすか？」

杏子は、テーブルの上に伸びてしまった。　彰橋が、居なくなったかと思ったのだ。

杏子の心の中で、彰橋は完全に家族であった。　空気のようでいて、時には感謝したり、ドキドキしたりする。　最近、職場の若い女の子は、杏子が若返ってるという。　杏子も、一人でいる時に比べたら、格段に喋って、彰橋を連れて歩くから、確かに当たっているかもしれない。

杏子は、椅子に座ったままに、手を伸ばしてレンジのスイッチを。

―ウ～ン―

レンジが回る。　1分して。

―チン―

「出来ました」

今のドッキリ感で、杏子の髪が乱れている。　レンジを開けてみれば、彰檎のお手製のチキンドリアであった。

「いい・・匂いっす・・一人でか」

最近、一人で食事は少ない。　しかも、こんな遅い時間なら、全く無いに近い。

「ふぉ～く、どこ？」

探す杏子は、なんだか彰檎の居なかった12月以前を思い出した。

フォークを取り、椅子に戻って、ドリアを一口。

「うん・・うまいっすね。　チーズさいこ～」

杏子は、これでも旦那になった男には、ちゃんと食事も作っていたし、家事もやっていた。　だが、成金の社長だった旦那は、自分の気に入らない事自体が嫌で、杏子に暴力を振るってもいたし。　杏子が、夜を一人で過ごし出すのも、籍を入れて直ぐだった。　別の女の元を転々てして、家に帰ってくるのは、月に数える程度だ。

「はふ・・なんか思い出すわ・・・あの頃を」

一人で、旦那の帰りを待つ気分が味わえた。

そこへ

「ただいま、杏子さん」

彰檎の声である。

杏子は、ハッとして。

「おかえんなさいな」

中に入って来た彰檎は、杏子が食べてるのを見て。

「お花見は楽しかったですか？」

杏子は、ドリアを一口して。

「おす・・・ただ・・・ウザいのも居たけど」

「お正月に、電話してきた方ですか？」

「うん。　自慢話のラッシュだった・・・面白いこと言えっつ～の、

蘊蓄にもなっとらんかった」

「杏子さん、遅くなりました」

彰檎が、頭を下げる。

杏子は、首を振り。

「いいの、仕事なんだしね。　ま、一人の頃の感じを味わえた・・・う〜、いい匂い」

杏子は、彰檎からいい匂いがするのを感じた。

「はい、バイト先の余り物なんですけどね。　バイキングで残ったケーキとかローストミートとか貰ってきました」

「お〜、まだくえるぞ！」

彰檎は、ピタリと手を止めて、

「あの〜・・・お花見で食べてきたんじゃ〜・・・」

「いや、歌って呑んでが先だった。　あんまり食べてないのよ〜、それいこいこ、ご〜ご〜」

杏子の胃袋のパワーは、計り知れなかった。

彰檎は、杏子の為の用意をしてあげる。　杏子も、お手伝い。

「彰檎君、あ〜んしてあげよっか？」

「いっ・いいですよ」

キッチンに立つ彰檎は、顔を赤らめて遠慮するも、杏子はその肩に後ろから手を置いて。

「遠慮はいらんぞ、若者よ」

「ええっ？　遠慮じゃないですよっ」

「いいではないか、いいではないか～」

「それ男のセリフですよ～」

彰檎は、結局のところ杏子に“あ～ん”を受けることになった。

だが、やはり彰檎自身も、杏子と暮らす内に女性の事が少し解りかけてきたのか。

「じゃ、僕もしましょうか？」

杏子は、彰檎を見て。

「おお～、解るようになってきたじゃないか若者よ～」

と、彰檎から食べさせて貰う。

（なんか、しあわせ～）

遅く起きる事が確定な明日であった。

さて、次の日。

「ふわぁ～・・・」

土曜日の朝・・・・というか、昼。　杏子は、のんびりと起きてきた。

彰檎は、もう起きていた。　まだ、コタツに入っている。

「おはよ～」

「おそよ～です、杏子さん」

「うむ、昼だね～」

ネグリジェに、セーターを着る杏子は、そのまんまに歯を磨いて居間に座った。

「はい、コーヒーです」

「おお～、お目ざだ～」

杏子は、砂糖やミルクを手元に引いて。

「大学ど～ですか」

彰檎は、サイエンス雑誌を手に。

「始まったばかりですからね、まだ講義も始まっていませんが。サークルの勧誘が凄いですね」

「おお～、懐かしいの～。　サークル・・・ええ響きじゃ～」

杏子の顔が、あの頃へと思いを馳せるものに。

「そういえば、杏子さんも大学行ってましたよね？」

「ま～ね、東大なんて高い台にはいってにゃいが」

「・・・・岸壁に行かなきゃいけないじゃ～ないですか・・・・して？　サークルとかは？」

杏子は、ニマニマして、

「ま～、少々ね」

「？　まさか・・・・」

彰檎は、パッと雑誌を引く。

「？　何？　何よ。　そのアブナイ人を見るような目は」

「いや・・・・大食い同好会とか・・・・」

「・・・・違うって」

杏子は、ちょっと落ち込んで否定し。

「空手の同好会と、デザート愛好会を掛け持ちしてた」

「ああ、杏子さん、ケーキとか作るの上手ですもんね。　それに空手か～・・・・終わった後、食べそうですね～」

「彰檎君・・・・食べるから離れようね」

杏子が、少し怖くなった。

「は・はいっ」

杏子が、コーヒーを啜る。

「でも、杏子さんって、綺麗だから男性とかに好かれたでしょ？
もう、ウチの構内に女性の学生の美人コンテストの張り紙ありましたよ。　なんか、結構盛り上がるみたいです」

「いやいや、潰してたもん」

彰檎の手が、ページを捲りかけて止まった。

「・・・だ・・誰を・・？」

「え？　男。　楽しく遊んでるときに、うるさいから」

彰檎は、雑誌に顔を隠して横に凭れて。

（きた～）

やはり、杏子の武勇伝はまだまだ続きそうであった。

彰檎は、雑誌を閉じると。

「じゃ、買い物行きますか・」

「あ、おお～、今日は、晴美の子供の誕生日をお祝いするんじゃっ

た。　おし、いこいこ、ケーキつくちゃお～」

「ですね。」

杏子の高校生としての同級生の晴美は、６歳になる男の子がいる。
　その子の誕生日が、今日であった。　晴美に、どう祝ったらいいかと杏子が聴かれて、

「ウチに来る？　みんなで祝ってあげようか？」

と。

晴美は不器用で、料理なんて出来ないから、喜んだ。

さて、買い物に来た杏子と彰檎は、あれやこれやと買う。

「しかし、晴美さんのお子さんって、もう６歳なんですね～。　一人で大変ですね」

「そうね・・晴美って男に遊ばれるタイプだから・・・色々大変だったのよ。　しかも、子供の優君っていうんだけども、自閉症気味なの」

彰檎は、自分も片親だけに、解る気がする。

「晴美さん、喜んでくれるといいですね」

「ふむ、美味しい食事は、心を育むのだ。　がんばろう」

杏子は、一人頷いている。

彰檎は、遠くの豆腐コーナーから、杏子を見ているおばさんが居るのを見て。

「さて、お肉でも」

と、逃げる。

「うむ」

杏子も、続いた。

一通り買った時、もう3時を回っている。

二人は、帰るなりに準備に掛かった。

彰檎は、晴美の子供が好きなものを聴いていたので。　肉団子に、パスタサラダ、ハンバーグにジャガイモのアルミ焼きをつけて。さらに、スープシチューと、野菜たっぷりの春巻きを。

杏子は、晴美や茜や恵理も来るので、2個分のケーキを。　彰檎と協力だから、捗りがいい。　ホワイトケーキと、マロンのロールケーキだ。

夕方、6時を回る頃。

玄関のチャイムが。

「お、来たかな」

迎えに出れば。

「こんばんわ～」

晴美と、恵理と、茜が揃っていて、晴美の前には男の子が。

「いらっしゃい、さ～はいって」

晴美は、何時もの派手なファッションでは無く。　ジーンズに、白いセーターだ。

「お～、晴美～、カジュアル似合うじゃんか」

「普段着よ。　それより、いい匂い。　杏子、お招きありがとう」

晴美は、そう言うと。

「きょうこさん・・、ありあとう」

晴美の子供が、挨拶する。　名前は、“優”（ゆう）。　少し言葉の発音が悪い障害を持っている。　頭はなんでもない。　凄く大人しく、晴美も少し困っているようだとか。

そこへ、彰檎の声。

「いらっしゃい、上がってください～。　料理出来てますよ～」

晴美は、杏子に頷く。

杏子は、晴美を見てから、優を見て。

「向こうに、美味しい料理出来てるよ。　いこいこ～」

優は、杏子には慣れているが、以外に人見知りが激しい。

頷いて、杏子に手を引かれていく優。

「へ～、さっすが」

おもいっきり人見知りされていた茜は、頷いて中に。

キッチンのテーブルに、ずらりと並んだ料理。

「うわ～、すんごいじゃん！！」

晴美が驚く。

「見たか、姉弟の合体じゃ　二人は、早い」

仁王立ちの杏子。

彰檎は、呆れ。

「さ、冷めないうちにどうぞ」

と、椅子を引いて、優に微笑み。

「いっぱい食べてね。　杏子さんに、取られないうちに」

茜は頷いて。

「言えてる」

どっと笑いが起こった。

「アタシだって、節操あるわよ。　彰檎君、後でおしおきしてあげるわ」

彰檎は、笑って優を座らせた。　優は、テーブルの上の料理をびっくりした目で見ている。　可愛い男の子だが、少し口元が歪んでいる。

「たえていいの？」

彰檎は頷いて。

「うん、優君の料理だから、食べて。　ケーキもあるから、お腹いっぱいになる前に言って。　切るから」

すると・・・優は、料理と彰檎を何度も見て、

「うん・・ありあとう」

と。

見ていた晴美は、厚ぼったい唇を触りつつ杏子に小声で。

「あの子が、あんな風に人に尋ねるの無いわ・・・私も料理の勉強しようかな」

「作ってあげなよ。　優は、貴女の血を分けた分身なんだもの」

「うん・・・来て良かったわ。　杏子にも、彰檎君にも感謝だね」

こうして、優の誕生日を祝うパーティーが始まった。　そして、茜や恵理による、杏子の武勇伝のバラしから始まり盛り上がる。

いつもは、直ぐに食べるのを止める優らしいが。　今夜は、笑い顔まで見せて食べる。

彰檎は、優にあれやこれやとゆっくり語り、笑わせていた。　楽しむ女性達のほうが、彰檎の優しさに見とれていた。

トランプでゲームをしたり、彰檎のピアノで歌を歌うのも、優は元気に参加していた。

中でも、部屋に有る物を一人が決めて、それを3つの質問をして当てる“迷宮の扉”というゲームを、絵を描いて当てるとアレンジしたら。　優は喜んで絵を描く。　下手だが、一生懸命に描く。

晴美は、それを見て。　働いていても、子供に目を向けていない自分を認識したのだろう。　１０時頃、優が寝てしまい。　杏子達と酒を飲み始めてから・・・。

「なんか、子供の初めての部分ばかり見るわ・・・駄目な母親ね」

と、泣き出した。

彰檎は、杏子や、理恵や茜を見る。

杏子達は、慰めたり摩ったりして、

「晴美、今日は泊まっていきなよ。　どうせ、明日も休みだから、ゆっくりしな。　ね」

と。

だが、晴美が、

「どうして・・優は、私なんかの子供に生まれたんだろう。　杏子みたいな優しいお母さんの所に生まれれば幸せなのに・・・」

と、言った。

「晴美、そんなこと言うもんじゃないよ」

と、杏子が言う。

すると、彰檎が。

「晴美さん・・・それはあんまりですよ」

と。

顔を上げる晴美は、彰檎を見る。

「だ・・だって・・」

「晴美さん、優君は、お母さんと一緒だから、今日はあんなにはし

ゃいだんですよ。　笑う時、必ず貴女を見ていたでしょ？　“お母さん楽しいね”。　“お母さん面白いね”。　“お母さんも楽しいでしょ？”って、確かめてるんですよ。　優君の見る先に貴女が居るのは、貴女がお母さんだからですよ。　お母さんの晴美さんから、子供の存在を否定したら、子供は誰を信じればいいんですか？。優君が、それこそ可哀想です」

晴美は、彰檎が母子家庭だったのを杏子から聞いている。

「ご・・ごめんなさい」

「僕に謝らないで。　優君のお母さん、優君は、晴美さんが居る限り一人じゃないです。　晴美さんも、優君が居る限り、一人じゃありませんよ。　子供は、親を。　親は子供を選べないと言いますが・・・選ぶ必要は無いんです。　生んだ人こそ、育ててくれる人こそ親なんです」

晴美は、彰檎に項垂れて頭を下げた。

彰檎は、ワインボトルを晴美の前に置いて。

「もっと呑んでいいですよ。　さっきの言葉と心は、此処に捨てていってくださいね」

と、立ち上がり、優の元に。

自分と寝ると言っていた優を、自分の部屋に連れていくのであった。

杏子達と呑む晴美は、あまり呑まなかった。　代わりに、母親としての不安や、優の心配をぶちまけた。　杏子は、晴美自身も優を愛

してる事を知る。　いつも、面倒臭そうにしていた晴美だが、やはり母親であった。

杏子と、晴美は同じ部屋に寝ることに、茜と恵理は、客間に。

そして、静かな夜を迎えた。

そして、次の日の朝。　日曜日。

杏子が、晴美と共に起きたのは、朝の９時を回っていたよりも、優の歌声だ。

「おはよ～・・って、歌？」

杏子が、目をぱちくり。

「優の声だわ」

晴美も、起きた。

二人が居間に行くと。　ＴＶにて、朝の宇宙刑事の特撮番組を見ている優と彰檎がいる。

「あ、おはようございます」

彰檎が、寝ぼけ眼の二人に挨拶する。

「おう～す。　おはよう」

「おはよう」

すると。

「おあよう～、おがあさん。　きようこさん」

と、優が、笑って。

「おはよ～ん」

杏子が、笑うのに対し。　晴美は頷いて。

「おはよ、ほら、ＴＶ始まってるよ」

と、微笑む。

優は、ＴＶに向いた。

杏子は、晴美に。

「昨日の残り、食べようか」

晴美は、呆れ笑いで。

「昨日あんだけたべたっさ」

「いいじゃろうが。　彰檎君と、優君は食べるかな？」

彰檎は、

「少しで」

優は、杏子をみて、頷いた。

「わかた～」

杏子が言うと、晴美が。

「あの子のは、私がやるわ。　温めるだけだし」

杏子は、晴美に任せた。

晴美が、温めた皿を出して、テーブルに置くと。

「優、出来たよ。　食べな」

すると、優は素直にテーブルに行った。　晴美が椅子を引くと、直ぐに座って食べる。

そして、晴美を見て。

「おかあさん、おいしぃいね」

晴美は、頷くと。

「今度、どれか家で作ろうか。　おばあちゃんと一緒に」

「うん、てつあう」

晴美は、優の頭を撫でた。

杏子に纏わる影

１０．杏子に纏わる影

Ｇ，Ｗを手前にして、彰檎は毎日が勉強にバイトに杏子の相手と暇の無い生活である。

杏子は、春先から夏入りに向けての服を買うのに彰檎を連れ出した。

「彰檎センセー」

大手の大型服販売店の入ったところにて、いきなり“センセー”とは。

「どうしたんですか？　いきなり“センセー”なんて・・・」

彰檎は、もう引いている。

「ええい、構えるでない」

杏子は、春物のセーターに、白いジーンズ姿。　彰檎は、いつも通りの黒スタイル。　周りからは、姉弟と見える。　引いた彰檎に、苦笑いの杏子。

杏子は、入り口の横にあるベンチのスペースにて、彰檎と向き合い。

「いやいや、実はね。　北海道に行くツアー旅行あるんだわさ。

彰檎センセーが良ければ、申し込もうと思うんだけど、いくかにゃ

？」

彰檎は、その期待の満ち溢れた杏子の瞳を見て、

（すんごい行きたい眼差しだ・・・断ったら泣かれそうな・・・）

彰檎も、大学の方で色々とイベントが在るとかで誘いを受けていた。
確かに、まだ返答はしていないが。　同じ学年の生徒に強制的に参加させるぐらいの誘いを受けているのは、他の男性学生が、目的の女子を誘う為か。　もしくは、女子生徒が彰檎を誘っている訳である。

バイトや、勉強を考える彰檎としては、教授の近くで研究の手伝いでもしたいところだし。　どっちも行かない方がいいのだが。

「保留で、大学の予定と合わせてみます」

すると、杏子は。

「あ～、そうか。　大学ならこの頃は同じ学年の生徒でどっかに泊まりに行くイベントとかあったよね～」

彰檎は、頷いて。

「自分は、あまり行きたくないんですが。　もう少し、様子見ます。
バイトの予定とかありますし」

「うむ、確かに・・・仕方ないか～」

「夏なら楽でしょうけどね～。　もう少し近い所はありませんか？」

「んじゃ、那須にでも行く？」

「帰ってから、旅行の雑誌やネットの情報を見てみましょう」

「行く気はあるのね。　優しいのぉ～」

二人で、店内に入って行く。　杏子は、服やバックなどは以外にブランド志向ではないし、高いものより自分の好きなものだから、お金は使わないほうだろう。　だが、彰檎になると、気が緩むのか、あれやこれやと服をコーディネイトしたがる。

（使わせないようにしないと）

彰檎は、好みをやんわり適当に言って、Tシャツやズボンなどそこそこ1万円以内に収まるように買わせた。　普通に買わせたら5万ぐらい買いそうな感じで始末に困る。

だが、彰檎は杏子に感謝もしてるし、杏子を嫌いになれない自分を素直に認めてもいる所があった。

時折、杏子は彰檎に大胆になる事が多い。　酔うと、抱きついたり、キスするなり、彰檎の方がドギマギするくらいだ。　二人きりだと、杏子は風呂上りのバスタオル格好でノコノコとミネラルウォーターを呑みに来る。　彰檎は、なるべく見ないようにしていると、酔った杏子がやってきてはからかわれたり。　いや、可愛がられたりか。

ま、杏子と彰檎の相性はいいということか。

次の日の事である。

杏子は、六本木ヒルズにある会社にて。　昼になったらコンビニ弁当を持って若い社員４～５人と外のベンチにて昼御飯と。　風が幾分に強い日で、杏子は社内に戻りたい気分であった。

「以外にサムい～」

と、新入社員の女子。　メイクは上手いが、どうも接客に集中しない大卒。

杏子の横にいた、女子社員の一人が。

「樋川先輩は、Ｇ．Ｗはど～するんですか？」

ピラフを食べる杏子は、風に揺れる葉桜を見て。

「う～ん、彰檎君のスケジュールと合うなら、小旅行にでも行こうかと」

「うわ～、恋人か姉弟みたいなあの彰檎君ですか～？　私も行きたい～」

「でも、もうＧ．Ｗまで２日だもんね～、宿の手配も無理かな～」

「時期が時期ですもんね～」

杏子は、そのとき。　遠くの店の影に色眼鏡にスーツ姿の男を見た。

７：３に分けた髪が光っている。　黒に白のストライプが入るスーツが、やけに目に付いたのだ。

「あ」

杏子は、短く声を上げたのは。　その男に見覚えが有ったからだ。

「どうしたんですか、先輩？」

「え？　あ・・嫌・・こっちの事」

杏子は、それから同僚の雑談に生返事しかしなくなる。　なんか仕事にも気が入らなくなって居る様子で、同僚の女子社員は、杏子の元気が無くなったのを確かに感じた。

さて、その日は彰檎も早く帰る日。

４時頃に駅から出て、スーパーに寄って帰る気だったが・・・。

「おい」

いきなり、低い男の声で肩をつかまれたのは、予想外甚だしい。

「は？」

パッと見た男は、彰檎より背の低い、スーツ姿の３０代ぐらいの男性だった。　７：３に分けた髪、ややキツイ目が色眼鏡より透けて見える。　鼻が大きく、口が少し裏返って見えるのが印象的で有る。

「なんですか？」

彰檎は、夕日の眩しいスーパー前の外のカート置き場で、そう尋ね返した。

「ちょっと、話があるんだよ」

「はあ」

男は、彰檎を呼んでスーパーの脇の駐車場に・・・。　まだ、春の為か、影に成る脇の駐車場は寒い。

男と彰檎は、向き合う形で面と向かう。

「貴様、杏子のなんなんだ？」

その言い方は、随分と高圧的な言い方だった。

「はあ・・・貴方は一体何方ですか？」

すると男はいきり立ち。

「誰だっていいだろうがっ！！」

と、大声を出した。

このとき、彰檎は杏子の旦那の事が脳裏に浮んだ。　この横暴な態度がひらめきを呼んだのだ。

（この人・・・まさか・・）

すると、そこにマンションの大家さんである太ったオバちゃんが来た。

「あら彰檎クンじゃないの、一体どうしたの」
と。
「え？　あ～っと」
彰檎は、どうしていいか解らずに困ってしまう。
男は、大家のオバちゃんに向かって。
「ババァっ！！　うるさいあっちいけっ！！」
すると、背の低いながらに元気だらけの大家さんは、男に向かって言い返す。
「うるさいだって？　うるさいのはどっちだい！　この彰檎クンはウチのマンションの入居者だよっ！！　アンタは一体誰なんだよっ！」
この大家さんは、以外に口うるさい所のある世話焼きおばさんだが。
面倒見のいい人でもあって、ゴミをキチンと出し、日曜日の朝にはマンション周りの掃除を良く手伝う彰檎や杏子を良くしてくれる。
「ちっ、邪魔が入った。　又来るからな」
男は、苛立たしげにそう言うと、駅に向かって歩き出す。
「こらっ！　逃げるのかいっ！！」
オバちゃんが、そう言って追おうとするのを、彰檎が止めた。

「待って！　大家さん、もう大丈夫。　もう、ほっといていいよ」
彰檎に言われて、大家はぶつくさと止める。　この大家さんも、離婚暦があるらしく。　野蛮な男が大嫌いならしい。
「なんだいあの男は・・本当に男ってのは暴力しか知らないのかい・・」
彰檎は、宥めてお礼を言って、スーパーの中に入っていった。
男の大声で、周りのお客には、遠い目で見られた彰檎であった。
必要な物だけ買って、大家さんとマンションに帰る。
帰り道。　春の風が強く人通りも多い道路の歩道にて。
短いパーマの大家さんは、紫と白のメメッシュの入ったパーマを振るわせつつ。
「全く、野蛮な男は大嫌い。　昔の亭主を見てるみたいで、イライラするよ」
「大家さんの旦那さん、そんな人だったんですか」
彰檎は、子供が５人もいる大家の買い物袋を幾つか持ってあげていた。
大家のオバちゃんは、もう６０を超える皺のある顔を震わせて。
「酒で酔っ払って、すぐに暴れる旦那だったわ。　お陰で、こんな

に逞しくなっちゃったわよ。　昔は、大和撫子だったのにさ」

そう言って笑う大家に、彰檎も笑って返す。

「彰檎クンは、そんな男になったらいけないよ。　杏子ちゃんを泣かせたらバチがあたるよ」

彰檎は、笑って。

「大丈夫です。　僕が泣かされても、杏子さんは泣きませんよ。杏子さんの方が強いですから」

「あははは、それはいいことだわ」

大家さんは、そう言って笑い。　彰檎と大家のオバちゃんは、二人揃ってマンションの入り口の門を越えていった。　もう、夕日が暮れて、辺りは暗くなってきていた。

彰檎は、杏子が帰っているのを開いていたドアで知る。

（どうしよう・・・今日の事聞いていいのか・・悪いのか・・）

「ただいま」

すると、

「おかえり」

杏子の声だが、どうも張りが無かった。

買い物袋を持って、廊下を行ってリビングとキッチンが繋がっている間に出た。

杏子が、コタツに入ってテレビも点けずにでれ～んと横たわる。

（元気ない・・・どうしたんだろう）

彰檎は、キッチンテーブルに買い物袋を置いて、料理にかかった。

すると、杏子がぬるりと身を起こして、

「彰檎君・・・今日、ちょっと相談あるんだけど」

「はぁ、なんでしょうか」

「うん・・・アタシとさ・・・別れて暮らしたい？」

いきなりだ。　彰檎は、さっきの男性が気になって、“まさか”と思って振り向いた。

「・・・」

見た杏子は、顔はいつものままだった。

（は～、良かった。　また、叩かれたりしてないみたい）

「ね、杏子さん」

「ん？」

「今日、別れた旦那さんと逢ったの？」

「え〝？」

杏子の顔が、見る見る青ざめた。

（やっぱり）

彰檎が思った時、杏子は立ち上がり遣って来た。

「彰檎君、なんで知ってるの・・・まだ、見かけただけだけど」

彰檎は、さっきの出来事を話した。　杏子の顔が、今度はどんどんと怒った顔に。

「アイツ、彰檎君にそんなこと・・・」

どうやら、彰檎の見た男性の姿からして、間違い無く杏子の旦那であった人物らしい。

彰檎は、杏子に寄った。

「杏子さん・・・聴いていい？」

「ん？」

杏子は、彰檎を見返した目は、不安な面持ちであった。

「杏子さん、またあの人に暴力を振るわれるの？」

杏子の顔が、驚きや恐怖や色んな感情に歪んだ。　聞いた彰檎は、杏子を見て。

「僕、心配だから離れたくないな・・・杏子さんと、離れるのは今は嫌かな・・・」

と。　そして、料理に戻る。

「彰檎君・・・彼は、君にも・・暴力振るうかも・・・見境が無くなる人だから・・」

杏子は、声を落としてそう言った。　杏子の声の静かなこと。

しかし、彰檎は玉葱の皮を剥きつつ。

「杏子さんは、法律に守られてる。　でも、今日のあの人はそんなの関係ない感じだったよ。　殴られるとかそんなのより、杏子さんが駄目になちゃうのが嫌かな。　昔・・お母さんに言われた。

“自分を大切にしてくれる人、大切にしたい人は守りなさい”

だから、僕はお母さんが死ぬまで傍に居たんだ。　杏子さんだって、変わらない。　杏子さんが、僕の為に気落ちするのも嫌・・・あの人に殴られるのも嫌・・・そんな所」

「彰檎君・・・ありがと・・」

杏子は、彰檎の背中が強く見える。　彰檎は、一見弱弱しく見えるが、芯はかなり強い。　自分の気持ちにしても、ハッキリしている。

杏子は、なんとなく安心して落ち着いた。

ただ、あの男だけは気になった。　これから、また面倒を掛けて来そうな気がする。

杏子かこのマンションに移ったのも、ストーカーになりそうな元夫から逃げてのことだ。　裁判沙汰になり、杏子に元夫は半径１０メートル内に故意に近づくことも、逢うのも禁止になっているわけで。

もう、脅威は去ったと思ったが、そうでは無いようだった。

杏子の脳裏に、離婚から元夫の暴力のことまで相談して弁護を引き受けてくれた女性の弁護士の存在が浮んでいた。

（彰檎クンのこと在るし、相談しておこうかな・・・）

２日後。

杏子は、仕事を早く終えたから、弁護士の人に連絡を取り。　３時の約束で渋谷の駅のファミレスにて待ち合わせた。

杏子が先に来たらしく、待つことに。　まだ客が少ないので、店員に待ち合わせを話して４人掛けのシート席に。　座って、コーヒーとケーキを頼んでいたら、

「ごめんなさいっ　おそくなりました～」

黄色のジャケットとスカートに身を包む短い髪の女性が杏子のテーブルの前に現れる。

「あら、こんにちわ。　コーヒーでいい？」

杏子の問いに。

「彼女と一緒の」

と、現れた女性は言った。

座った女性に耳のイヤリングは、大きいガラスかダイヤかわからない涙の様なものが光る。　ぱっちりとした目に、大きい口。　小さい鼻が、小顔に似合う。　可愛らしい印象を受ける、女性だ。　弁護士の“市川　加奈子”は、杏子より年上の３５歳である。

市川女史は、荷物のバックやらファイルをシートの奥に置いて。

「最近は連絡無いから心配してたの、杏子さんお久しぶり」

笑顔が柔らかい、市川女史である。

「ごめんなさいね。　お忙しい中、呼び出して」

杏子が言えば。

市川女史は、手のひらをヒラヒラさせて。

「いいの、いいの。　ウチの事務所の所長なんて、こうでもして外に出てないと、ウルサイんだから。　それより、お話って何？」

「それがね・・・」

杏子は、彰橋のことも含めて、元夫が現れたことを話した。

「ストーカーの典型だわね」

と、市川女史は言ってから。　杏子をニヤニヤして見て。

「しっかしヤルじゃあ～りませんか杏子さん！　そんな可愛いカレシみたいな従姉弟さんゲットとは」

すると、杏子もテレ困りで。

「いや～、そんなことないのよ～。　ただ、ちょっといい子なのよ」

しかし、直ぐに本当の困り顔で、

「だから、彰檎クンが巻き添えのなったら困るの・・・最悪、別々に住んでも仕方ないと思ってる」

すると、市川女史は、あっさりと。

「べっこになる必要ないですよ。　向こうが、杏子さんの意思も聞かないで身辺に現れること事態が違反です。　むしろ、今の杏子さんが生き生きしているのがその従姉弟さんで、従姉弟さんも居たいといってるんだからいいじゃないですか。　あんな暴力を振るう男に比べたら、とってもいい関係ですよ」

「そうでしょうか・・・彰檎クンに、見えて無い所で暴力振るわれたら・・・」

「大丈夫です、こちらからアポイントをとって、違反規約の文章を送って再認識させますよ。　杏子さんが幸せになる権利を、向こうに奪う権利はないんです。　安全な暮らしも、保障されて当然です」

「市川さん、ありがとうございます」

杏子は、頭を下げる。

「いいんですよ。　仕事ですから」

市川女史は、そこまで言った後、杏子に顔を近づけて。

「ね、私も、従姉弟さん見てみたい」

杏子は、苦笑して。

「今度、ウチに遊びに来ます？」

「行きたいです」

市川女史は、笑って言う。

この市川女史、実は結婚をしていた。　だが、旦那は病気で死別しているとか。　杏子は、二人で裁判が終わった後に呑んだ時に聞いたのだ。　彰檎が来るまで、この女史とは何度も呑みに行った間柄であった。

杏子は、市川女史に話せたことで、安心を感じた。

だが、再び夫に付き纏われるとは思わなかったから、不安が完全に拭えた訳では無い。

来たケーキに手をつけようとしたら、杏子の携帯にメールの着信が、

「あ、メール。　失礼します」

―杏子さん、バイトは６時で終わります―

彰檎からだ。

「あら、彰檎クンから・・、市川先生」

ケーキを美味しそうに食べる市川女史には、

「はい？」

と、口をモグモグさせている。

「これから、お時間ありますか？　彰檎クンが、６時でアルバイト終わるそうなので、一緒に食事でも」

市川女史は、驚いてケーキを飲み干し。

「行ってヨカですか？」

「ヨカですたい」

二人は、そう言って笑いあう。　この日、市川女史は、酔いに酔っ払って杏子の家にまで泊まっていったのであった。

11、G，Wの旅行・前編

11、G．Wの旅行・前編

五月一日。

杏子は、マンションにてダラ～ンとしていた。　コタツの入って、横になっている。

「は～あ」

前夫の出現で、元気が無くなっていた。

昼、彰檎が帰ってきた。

「ただいま」

「しょ～ごく～ん、おかえり～」

彰檎は、杏子に近寄ると。

「杏子さん、明日から5日までは、開いてます。　何処か、旅行に行きますか？」

杏子は、まだ仕舞ってない電気入っていないコタツにて横になっていたのだが。　ガバッと起きて。

「え　？・・・マジ？」

彰檎は、杏子の姿にちょっと引いて。

「い・いえ・・イヤなら・・」

杏子は、言葉を奪って。

「イヤなもんかぁ～、いくじょー！！」

「そ・・そう・・ですか・・」

「くそ～、ムカツク馬鹿のお陰でイライラが溜まっとるんじゃ～。
イクで～行ったるで～」

元気が、いきなり回復する。

（・・・こんな人だったっけ・・・だったな～）

彰檎は、思い直して。

「で、お話が・・・」

杏子は、クルリと彰檎を見る。　まるで、ホラー映画のワンシーンのように、規則的に。

「ん？」

彰檎は、パンフレットを取り出して。　杏子の隣に屈んで。

東北のあるところに、日本中の伐採されかかった桜の木を集めた“

櫻の薗”って所が、２・３年前に出来たんだそうで」

「ほうほう」

「その、管理人をやっている方が、ウチの教授の弟さんで、今からでも行ける宿があるとか。　グループ参加なんですが。　行きますか？」

杏子は、櫻が大好きである。

「グループって・・・何人？」

「６０名の予定だそうで、今日が締め切りなんです。　一応、二人分の予約入れておきました。　もう一回、僕が連絡入れれば、行けます。　出発は、明日の夕方です」

「新幹線かなんかで？」

「はい・・ただ・・・参加する人は、みんなお年寄りとか、中年の方ですよ。　教授のご家族とか、講師の親とか・・知人とか・・」

杏子は、彰檎にズイっと近寄って。

「行くじょ～！！」

彰檎は、ビックリして後ずさり。

「何故・・・逃げる」

「いえ・・・アップは美しすぎて・・」

「んふふ・・・おじょ～ずね～」

「いや・・杏子さんの・・躾の良さかと・・」

ニンマリ杏子と、苦笑いの彰檎だった。

二人で、バタバタとして準備を整える。

「彰檎く～ん」

杏子が、自分の部屋にてバックに服を入れている。

「はい？」

食事の準備をしていた彰檎が、ヒョコっと顔をだす。

「わたすの、ピンクのパンティー知らない？」

「え〝・・どうして・・僕に聞くんですか」

彰檎の顔が、赤くなる。

「だってさぁ～、洗濯は二人でやってるじゃん」

「は・・はぁ・・杏子さんのは、いつもの所に置いてますが」

「取って食べてない？」

彰檎は、それこそしどろもどろになって、恥ずかしがって。

「しっ・しませんよっ」

と、引っ込んでいく。

「んふぅ～、かわい～なあ～」

杏子のエネルギーは、全快したようだ。

さて、食卓にての彰檎の話では、櫻の咲きっぷりが今一で、去年は不評で終わったらしい“櫻の薗”

杏子は、モグモグ食べつつ。

「そんなの当たり前じゃない・・ムグムグ・・・全く・・」

「そう・・なんですか？」

「アッタリ前じゃない。　植え替えたばかりの木だもの、枝も、根っこも切ってあるのよ。　元のように咲くのは、五年後十年後よ。いい女が出来るのと一緒よ」

「へ～。　詳しいんですね」

「田舎の近所のオッサンが昔言ってた」

「・・・・オッサン情報か・・」

彰檎は、ポツリと横で漏らした。

さて、彰檎は密かに、休みの６日まではバイトも休んだ。　杏子の元気の無さ過ぎが心配になったのである。

寝る前、「英雄」「月光」「フィガロの結婚」などを、ピアノで弾く彰檎。　杏子の最大の贅沢である。　彰檎がピアノを弾くとき、彰檎の顔はやや笑った穏やかな顔になる。　いつもの澄ました顔の彰檎より、より可愛く、よりいい男に見えるのだ。

夜、十時過ぎ・・・二人、寝るのだが。

「これ」

部屋に入る杏子が、彰檎を呼んだ。

「はい？」

来た彰檎の腕を引き、杏子は唇をまた舐めてやる。

「あ・・ききき杏子さん・・」

恥ずかしがった彰檎は、口を押さえて赤面する。　顔から、湯気でも出そうなくらいに赤い。

「ありがと、我が従姉弟よ～。　礼じゃ、喜んで受けとレイ。　おほほ～」

杏子は、部屋に戻った。

「はあ～・・・・」

ため息一つの彰檎だが、行こうとすると・・杏子がドアをまた開いて。

「一緒にねんねするかえ？」

彰檎は、全力で首を左右に振るった。　飛んで部屋に行く彰檎。

見ている杏子には、可愛い犬のようである。

（ういやつじゃ～・・・気を遣わせちゃったな～）

杏子は、彰檎の気遣いを感じていた・・。　杏子にとっては、なんともピッタリな人物が彰檎であった。

次の日、昼間に彰檎は、ツアーではないが、教授に言われた場所に杏子と行った。　ま、東京駅の新幹線乗り場前の、石のオブジェが在る所である。

「ほ～、これが御繰クンの従姉弟のお姉さんかね。　綺麗な方じゃないか～」

白いスーツでガリガリの枯れた棒きれのような、白い毛が目立つ初老の男性が彰檎の大学の教授である。　あだ名は、“鳴けない松虫”で、凄まじく歌がへたっぴな、変わり者だとか。

「松虫教授、参加させて貰って有難う御座います」

「有難う御座います。　彰檎君の親代わりしてます」

二人で、挨拶すると。

ふっくらとした感じの、礼儀正しい感じというか、上品という感じの小柄なおばさんが、教授の後ろから出てきて。

「あら、アナタの言ってた御繰君ね」

と、教授を見てから。　二人の前に出て。

「ウチの夫がお世話になってます」

と、キチンと挨拶をしてくる。

彰檎も杏子も恐縮して、

「い・いえ、此れから4年間お世話になります。　よろしくおねがいします」

と、二人で、挨拶し返した。

教授は、ケタケタ笑って、

「いや～、御繰君はいいピアノ弾きだよ。　カラオケの練習にいい生徒じゃ～。　頭もいいしのお～」

彰檎は、杏子に耳打ちして。

（すんごい、音痴です・・）

（なるほど・・）

だれも付き合わない教授のカラオケ練習に、彰橋が付き合わされたのは些細な事が切っ掛けだ。　壊れたピアノに悩んでいた教授を。
彰橋が助けてしまってから、不毛な歌の特訓が始まっている。
3日に一度は、昼に練習に借り出される。　ま、誰も聞きたくないから、彰橋のピアノの腕を大学で知るのは、この教授ぐらいなものか。

さて、旅行に集まったのは、５６人とか。　殆どが、中年から初老の夫婦やおばさまばかりで、教授の知人や、生徒の親や、学生４・５人。　賑やか過ぎる人たちばかりであった。

「楽しそう」

杏子は、以外に嬉しそうで、彰橋としては嬉しい限りだった・・・。

１２、Ｇ，Ｗの旅行・中編

１２、Ｇ．Ｗの旅行・中篇

彰檎と杏子は、午後の新幹線に乗り、ワイガヤしている周りの中で指定席に並んで外を見ていた。

「本当に、知り合いというか寄り合いの旅行みたいね」

「ですね。　教授は、かなり顔が広いみたいです」

前のシートでは、並ぶ通行路を挟んで、おじさん達がサキイカや持ち寄った物をやり取りしている。　もう、呑んでいる人も。　彰檎と、杏子もミカンもらったりして。

通路側、彰檎の横には通路を挟んで若い女の子が二人。　見たところ、教授にも挨拶をしていたから大学生らしい。　例に漏れず、彰檎は横など見てもいないが。　杏子は窓越しの反射で、女の子二人がチラチラと彰檎を見ているのが解った。

（むむむ・・・・見取るな～）

一方の彰檎本人は、これから行く場所のパンフレットやら情報冊子を見て、

「杏子さん、どうやら近くの漁港ではフカヒレとか、アワビも売ってるみたいですよ」

「なぬ、ホント？」

電光石火の速さで、彰檎の方に向く杏子。

（は・・早い・・・）

彰檎のみならず。　女の子二人もびっくりしてた。

ま、見た目、２０～６・７の杏子。　彰檎とは、姉弟みたいで付き合っているカップルとは思えない。　シッカリ者のお姉さんの印象だろう。

だが、“杏子さん”と彰檎が呼ぶのを見ると、恋人のようにも見えてくる訳で。　隣の女の子の妄想は、目的地の駅までは止まらなかったのだはなかろうか。

降りた駅は人の東北地方の山間の都市。　曇り空で、まだまだ寒い。
　やはり東京とは離れた場所。　都市の大きい駅の割りに人はまばらに見えた。　夕方で、二階の駅内の窓から見下ろすバスターミナルなどは、ビルの日陰でもう暗がりであった。

松虫教授が、コンダクター代わりで、

「よ～し、迎えのバスが来とるはずじゃ。　今ケ～タイで連絡を入れる」

いちいち、言う松虫教授。　でも、客はそんな事は気にしていない。

連絡がついて、ロータリーに留まるバスに向かう一行。

「うわ・・二段バス・・・乗るの初めてです」

言う彰檎。　なんでも、バスの旅行は、小学生以来で、中学校も高校も彼は修学旅行に行ってないだそうな。

「うう・・・お母さんも可愛そうに・・・」

杏子が泣く。

乗り込んで、一階の奥の席に着くと。

「母が、良く謝ってました・・お金無いからごめんなさいって・・・」

「やっぱり」

彰檎は、優しい顔で。

「でも、僕はあんまり気にしてませんよ。　出来ない事を悔やむの、なんか面倒なんです」

「ええ～こや～、アンタええこや～」

泣く杏子の顔が、彰檎にはむしろ面白かったのは事実だった。

（杏子さんて、本当に面白いな～）

バスでは、松虫教授と、隣り合わせになった彰檎は、向かう中からカラオケを歌う松虫教授の訛声（ダミゴエ）を聞いて。

（す・・凄い・・・別名の中に“ダミ松”ってある意味がわかった・・・）

練習より凄まじい声だ。　マイクを握り、上着を脱いで、頭にネクタイを巻いて、昔の酔いどれサラリーマンだ。

「沖ぃで流さァ～れ、海育ちぃ～♪　陸のぉ何所がいいってさァ～♪」

演歌一筋と思いきや、こう見えてなんでも歌う。　だから、始末に終えない。　でも、気が若いので、学生で松虫教授は頼られる。

しかし、周りのオッサンの大半が酔っ払って、ドンちゃん騒ぎのバスの中である。

彰檎は、杏子が楽しそうに手拍子をしているのには驚いたが。

（このオッチャンおもしろ～い）

と、言うのに笑っていて、この雰囲気が嫌いじゃなかった。

バスは、一路北に向かい。　1時間半で、宿に着いた。

（松虫リサイタルだった・・・有り得ないでしょう・・）

苦笑いの彰檎は、夜の中降りた前に見えたお屋敷みたいな門構えを持つ宿の佇まいに感歎した。

「うわ～、雰囲気ありますね」

杏子も横に来て、

「おっきいい～。　篝火があるよ～」

宿の玄関先は、篝火が道を作るようにならんでライトアップしていた。

「いらっしゃいませ～」

女性の声がして、綺麗な桃色の春をイメージを見せる着物姿の女性が来た。　松虫教授が先頭に会う。

「いや～、今年もお世話になるよ～。　マリちゃん」

着物姿の、女優さんみたいな美人である。　見た目は、３０どうか。
　杏子と近いような印象だ。

「伯父様、いらっしゃいませ。　待ってましたよ。　伯父様と伯母様が来て頂かないと、せっかくの櫻がもったいないんで」

後ろからは、仲居さんが遣ってきて、案内をされて宿の中に。

宿は、純和風の屋敷宿。　昔の庄屋の家が松虫教授の実家だったとかで。　此処は、保養所と隠居所だった建物を改修して宿にしたんだとか。　全三階建ての、部屋数も１００近い大型旅館だった。

部屋に案内された彰檎と、杏子。　二人部屋である。

「うわうわ～、いい部屋～」

「ですね」

テレビも大型だし、壁に掛けられた掛け軸やら、絵も落ち着いていて畳の広がる8畳間が二つ。　片や寝室であった。　仲居さんが、夕食は宴会場で用意出来ていると教えて去っていく。

杏子は、隣の八畳間を開き、隣り合わせの二つの布団を見て。

「ミロ、ワカモノヨ。　キョウは、トナリアワセダゾ。　ムフフフフ・・・」

いきなり、片言のような言い方の杏子の眼は、完全に彰橋をからかっている。

彰橋は、顔をまっかっかにして、

「いっ一緒に寝れる訳無いじゃありませんかっ！！　ちゃんと、こっちの居間に移動しますよぉぉぉっ」

杏子は、腰に手を当てて、

「詰まらんじゃろう。　せっかく、二人じゃぞい」

彰橋は、上から恥かしい事を平気で言われて、ガックリと来た。

（アクマだ・・・ウチの姉さんは・・・アクマだ・・・）

さて、杏子は温泉ありと、着替えを出す。

彰吾も、同じ。

杏子は、宿のパンフレットを見て。　ニンマリして。

「フフフフフフフフフフフフ・・・・・・」

彰檎は、パッと振り返って。

「混浴に連れ込まないで下さいねっ」

杏子は、舌を出して。

「チッ、バレタカ」

「当たり前ですよっ」

杏子は、彰檎を見て。

「いいじゃんか～、ワタシぃ～、従姉弟なら見られてもオ～ケ～だぞい」

「僕が死にますっ！！！！！」

彰檎とは、どれだけ晩熟か。　普通なら、喜ぶだろうに。　ま、だから杏子が安心するんだろうと、友達は思っても居る。

「ショウゴチャン、お背中御流しいたしますわよ～」

「あう・・・・廊下で寝たい・・・・」

彰檎は、杏子の元気が回復し過ぎだと思った。

さて、それは、二人がお風呂に入ってから、出て浴衣に着替えた頃に起きた。

今は、G・Wの真っ只中。　しかも、杏子や彰橋達の大人数の客が入ったお陰で、さすがに鄙びた旅館も年に1・2度の大忙しだった。
相部屋も出た程だ。

その中で、救急車を呼ぶ騒ぎが・・・。

サイレンの音がロビーからしていたのを、杏子が先に気付いて行って見れば。　お客の人だかりが見えて、人の間から見てみれば・・・。

「あらっ」

若い色黒の男性が、頭から血を流して担架で運ばれて行く所だった。
玄関の外には、警察と女将が話しをしていた。

周りでは、

「どうしたの？」

「どうもこうもないよ。　酔っ払って走って階段を駆け上がった所に、食膳を片付けて降りてきた仲居さんにぶつかって転んだと」

「本当？」

「ああ、その仲居さんと、俺の仲間が一緒に降りてきたらしい。
風呂の場所の案内してもらってたらしい」

「あらま、随分と焦ってたのかしら」

「さあ、笑ってたらしいから、ふざけていたかあそんでて勢いついたんとちがうかな」

「そうね～、廊下なんて走るものじゃないものね～」

と、言う会話を中心に、お客達があれこれとくっちゃべっている。
ロビーは広く、休憩場所なんかもあるから、人が中々去らない。

（ふ～ん。　落ち着き無いわね～）

杏子は、浴衣姿で戻ろうとすると、其処に彰檎が来た。

「あら、杏子さん」

「ようぉ～」

「どうしたんです？　人が多いですね」

杏子は、彰檎の前に来て。

「怪我人よ」

「え？　ケンカとかですか？」

「ううん。　なんか、廊下を走って、階段に駆け上がった所で、仲居さんとぶつかったみたい。　不注意もいいとこって感じ」

「へ～、それは災難ですな、お客さんも、仲居さんも」

「ま～ね、あっ。　早くご飯たべよ～」

彰檎は、眼を細めて杏子を見る。

「・・・・」

杏子も、その眼差しに気付いた。

「なんにゃん？　ん？」

「いえ・・・お膳が幾つ必要かな～と・・・」

杏子は、ニンマリして。

「彰檎チャン、みんなの前で“あ～ん”して」

彰檎は、クルリと後ろに返って、

「部屋で食べます」

「待てこら～」

二人は、宴会場に行った。

もう既に、松虫教授夫妻やツアーのお客の半分は来ていて、宴会が始まっていた。　広さは、ざっと５０畳はある。　いや、もっとかもしれない。　３列に並んだお膳の列と、北側にステージ。　南側には、お代わり用の、味噌汁やら、煮物のお鍋が。

「うは～、宴会じゃ～」

杏子は、嬉しそうに空いてる席に彰檎を引っ張った。

「あら、御繰さんに樋川さん。　こっちにどうぞ」

エキサイトして、ロックナンバーをエライ音程の外し方で歌うステージ上の松虫教授の奥さんが、空いている向かい合う席に誘ってくれた。

「済みません、お言葉に甘えてお邪魔いたします」

と、キリリとして杏子。

「失礼して、座らさせていただきます」

と、彰檎。

奥さんは、微笑んで。

「どうぞ、楽しく行きましょ」

本当に落ち着いていて、老齢ながらも優雅さと気品が見えた。

「いただきます」

言う杏子に、彰檎は。

「ん～、お櫃が見えないな～。　杏子さんにこの一膳のご飯は、お

猪口に等しいです」

言った彰檎を、教授の奥さんが微笑んで。

「あらあら、そんなに食べるの？」

「はい、土鍋なみに」

杏子が、咽て。

「ゴホッ・ゴホッ・・コラ・・言うか、普通・・」

彰檎は、済まして食べ始めた。

さて、ステージ上では、中年のオッサンと、浴衣姿の松虫教授のワンマンショーが開催され、酔った客は拍手しててんやわんや、呑まないお客などは、余りの凄さに気が抜けてしまっていた。

杏子は、ステージの上の、七色イルミネーションに照らされてロックナンバーをグラサンかけて歌う教授を見て、呆気に取られるというより、感心して。

「歌は別にバイタリティーありますわ～。　いいお年なのに、気が若いですね」

奥さんは微笑んで。

「ウフフ、今日は特にかしらね～。　此処に来ると、いつもこうなの。　明日見に行く櫻の所為ね」

彰檎は、焼き魚を解しつつ。

「そう言えば・・教授も毎年此処の櫻を見るのは行事だと言ってましたね」

奥さんは、ステージ上の教授を見て。

「あの人の、可愛がっていた教え子さん・・・“櫻の薗”に携わった研究員だったの。　でも、病気で薗が開園する前に亡くなったの」

「あら・・お気の毒に・・」

「・・・ですね」

杏子と彰檎は見合う。

奥さんは、遠くを見るような眼で、教授を見て。

「その教え子さんが、娘ばかりの私達夫婦には息子みたいで・・・片山クンと云うんですが。　彼が作った櫻の薗には、身体が動く限り来るつもりなの」

と、言ってから笑って杏子と彰檎を見て。

「それに、私達はこの宿代はタダだから、ンフフフ」

と。

二人も微笑んで、頷いた。

さて、松虫教授も少し疲れたのか。

「では、自由にカラオケいきましょう。　どんどん歌って下さい」

と、降りてきた。

「おお～、御繰君とお姉さん、どんどん食べてくださいよ」

来た松虫教授は、そう言うと。　奥さんに、

「ちと、トイレ～」

「あ、私もいきます」

「うむ」

二人は、そう言って立ち上がって行った。

さて、先ほどの怪我人の迷惑の影響が、今出ていた。

トイレに行く松虫教授夫妻は、宴会場の出入り口でスリッパを履いて廊下に出た。　そこで・・・、

「ん？」

と、松虫教授は廊下の左奥を見る。

「あら、如何なさいました？」

紅い絨毯の敷かれた廊下に先、旅館の地下にある“ラウンジ”に行

く階段の所で、あの若い女将と仲居の女性がなにやら話している。

「ヘンじゃな～。　もう9時じゃろう。　女将は、地下で接客しとる時間なんじゃが・・・」

この宿の地下のバーラウンジは、夜の9時から11時までの開店で、女将がホステス代わりに接客している。　だから、上で見かけるのは珍しい。　バーと言っても、飲み屋というより、ピアノや歌やらのステージショウの余興が中心だ。　あまり、如何わしい雰囲気ではけしてない。　和風レストランで行われるステージショウと言えばいいか。

教授は、弟の娘である女将の元に行った。

「お～い、マリちゃん。　一体、どうした?」

行ってみれば、女将は困った顔で、仲居の女性と居た。　仲居の女性は、右手に包帯を巻いていた。

「あ・・伯父様、ちょっと困ってしまっていて・・・」

なんでも、今夜は女将と仲居さんもコーラスによるピアノの音楽コンサートをやる予定だったのだとか。　しかし、ピアノを弾く仲居さんが、この通り。　さっきの救急車で運ばれた若い男とぶつかったのが、ピアノの弾き手だったのだ。　完全に捻挫して、割れた茶碗で切り傷もあるとかで、もうピアノをちゃんと弾けそうに無いと言う。　仲居さんは、もう涙で誤り通しだ。

松虫教授は、直ぐに彰檎の顔が浮び。

「おお、それなら、ワシの知り合いにピアニストがいるぞい。　若いが、その辺のプロより上手いかもしれない」

女将の顔が、パッと明るくなる。

「本当ですか伯父様っ？！」

彰檎は、プロでもなんでもないのだが、教授は彰檎に敬意を持って言うのだろう。

「ああ、今日、ワシとツアーに参加しとる。　どれ、頼んでみようか」

女将は縋る思いで、

「お願いします。　今日は、旅行のサイトや雑誌を扱っている記者さんが居て、何とかしたかったんです」

「うむ、解った」

女将は、もし弾いてくれるなら、ツアーの宿代など要らないとまで言った。

松虫教授は、トイレに行ってから、早足で彰檎の元に行った。

「あ、帰って来ましたね」

と、彰檎が、教授を見つけた。

「うむ、カニが美味しい・・うは・・」

杏子は、頷きつつも、カニと刺身に舌鼓である。

さて、血相を変えた松虫教授は、彰檎の前に座るなり。

「御繰クン、ちと急な頼みがあるんじゃが」

「え？　・・・な、何ですか？」

教授は、理由を話した。

彰檎は箸を置いて、杏子を見る。

杏子は、彰檎の背中を叩いて、

「出陣じゃ、人助け人助け～」

「はい。　じゃ、席を外しますね」

すると、杏子は。

「いんや、アタシも行く」

二人は、松虫教授と共に廊下に出て。　女将の元に。

「彼じゃ、御繰クンじゃ。　ピアノの腕前は、保障する」

女将は、もう土下座に近い誤りで、頼んでくる。

彰檎は、誤りよりも楽譜を見たくて。

「解りました。　スコアを」

渡されたスコアを見れば、杏子に弾いている曲もちらほら。　どれも、童謡やフォークソングなどで、難しい曲は無い。

「これなら、練習要りません」

こうして、地下のラウンジホールに下りた。

ステージホールが中心にあり、周りをグルリと囲むお座敷席。　相撲の席と、ファミレスの座敷席の間のようで、春をイメージした梅、櫻、躑躅などの生け花や鉢植えが席と席の間に並べられていた。

席の数は、ざっと４０。　女将の話だと、この旅館の客だけではなく、他の旅館のお客も来ているとか。　元々は、保存食などを造る倉庫があり。　それを改修して、こんなステージにしたのだとか

「ほえ～、ステージのあるファミレスみたい」

杏子は、その暗さも無いし、入りにくさもない場所に驚いた。

彰檎は、自分の姿を気にして、女将に聞く。

「浴衣でいいんですかね？」

「ええ、事情はお話いたしますから」

「うし、彰檎クン。　がんばってこ～い。　向こうで、お酒貰って見てる」

と、杏子。

「御繰クン、頑張っておくれ」

「ごめんなさいね、こんな事を頼んで」

松虫夫妻にも、応援された。

「いいですよ。　僕でよければ」

彰檎は、笑って女将についていった。

杏子と松虫夫妻は、空いている４人用の居座敷に上がって、お酒を頼んだ。　杏子は、またおしとやかで落ち着いた女性に変わり、教授夫妻の相手もする。　流石に、接客業のプロであった。

さて、ステージ上では、待っていた仲居さん４人に、女将が合流して、彰檎がピアノの前に座った。

「皆様、大変お待たせいたしました・・・」

女将が、アクシュデントの報告と、ピンチヒッターの彰檎の紹介をして、１０時近くなってから、コンサートの開始となった。　【アメージングレイス】、【荒城の月】、【花】、と、曲が続く。

「う～ん・・・流石は・・・御繰クンじゃ～」

聞きほれる松虫教授は、北国の美味い酒に舌鼓。

「本当ですね～。　綺麗な旋律ですこと」

奥さんも、しっとりと聞きほれる。

（むははは、ワタシ、毎晩も独占してる）

杏子は、内心に人に知られるのがちょっと、寂しい。

一曲、一曲に、拍手が惜しまれず。　新しい歌のピアノナンバーなのに、お年寄りも聞き入って、1時間弱のステージは、あっと云う間に過ぎた。　最後の、曲。　【アヴェ・マリア】が終わるとき。

感動して、涙を流す人さえいた。

終わっての拍手は、座敷に膝を立ててのスタンディングオーベーションである。

拍手を浴びる女将の方が、泣きそうなくらいに喜んでいた。

お客を帰して、最後に杏子や松虫教授夫妻の元に彰檎が女将達と向かった。

「おおお～おかえり～」

拍手の杏子。

「はい、お水下さい」

と、彰檎。

「いや～、流石、流石じゃ、いい腕してるわえ」

「本当にね～、繊細な旋律が綺麗」

と、松虫教授夫妻が。

「どうも、間違わずに済みました」

女将の喜びは非常のものだった。

「本当に、本当にありがとうございます。　宿代なんて要りませんから、好きなだけ泊まって行ってください」

彰檎は、笑いながらも。

（そんなに泊まれない・・）

と、思ったりして。

しかしながら、彰檎が感心するのは、杏子の早代わり。　教授夫妻や、女将に対しての応対は、優しげで仕事をしている時の杏子であり。　確かに、出来る女に見える。

なのに・・・部屋に帰ると・・・。

「いや～いい演奏会だったッスね～」

と、オッサンみたい。

（ん～・・・ホント、同一人物なのかな～・・・背中にジッパーあったりして）

なんて思えたりして。

旅行の初日から、彰檎は忙しい一日だった。

１２、Ｇ，Ｗの旅行・中編（後書き）

こんにちわ＾＾　騎龍です＾＾

いや～、インフルエンザの熱の影響で、小説の内容が脱線しまくってます＾＾；

よろしく、お付き合いください＾＾

１３、特別編・櫻の薗

１３、特別編・櫻の薗

次の日、快晴に恵まれて。

「朝、ご飯だ」

起きて、杏子の一言。

彰檎は先に起きていて、ゆっくりと窓際で座椅子に座りながら窓の外の新緑美しい山の風景を見てお茶を飲んでいたのに・・・。

「ん？」

杏子に見れば、不自然に固まっている彰檎。　起きて、居間の方に行ってみれば、お茶を持ったままに止まっていた。

「若者よ、どうした」

彰檎は、苦笑いで。

「あははは、朝から胃袋が元気ですね・・・」

「お～っす、ばいきんグーだもんね。　気合が足りないかな」

彰檎、冷汗を覚えて、

（全部食べないでね・・・）

二人、まだ7時過ぎで朝食前の朝風呂と洒落込んだ。

岩風呂に浸かる杏子は、同じく朝風呂に来た松虫教授の奥さんと一緒になり、

「おはよう、杏子さん」

「あら、おはよう御座います。　奥様」

と、挨拶を交わして、湯船でおしゃべりを・・・。

一方、貸切の温泉の湯船に入っていた教授は、彰檎と逢う事は無かった。

8時前に彰檎が杏子と、廊下で会った松虫教授夫妻と食堂に入れば、女将がやってきて慇懃なお礼と挨拶を貰ってしまった。　女将の春桜の姿を縫い画かれた桃色の着物は、明るい外の朝日が取り込まれた食堂においては、一際栄えて見える着物である。

「いえいえ、もう宿代を只にして頂いているので」

彰檎も杏子も、女将に挨拶を返してから。　バイキング料理の並ぶテーブルに向かう間。

（あの着物・・・高いんでしょうか、杏子さん）

（メチャメチャ高いわ・・・大台の多分は片手三本は行くわ）

彰檎は、やはり母と貧しい暮らしをしていた為か。

（え～、３万円ですか？）

杏子は、おもいっきり首を左右に。

彰檎は、驚いた顔で。

（ごっ３０万・・？、ですか？）

杏子は、彰檎を見て。

「もう一つ」

「え・・・・・」

彰檎の頭では、未知の数字である。

杏子は、取り分け皿を彰檎と、自分に。

「彰檎クン。　成人式で安いの買うのでも２０万とかザラよ。　女将が着てるのは、京都の老舗の最高級品です。　ま、安く見て、２００。　でも、あれと同じモデル見た事あるのよ～。　２８５万だった」

彰檎は、首を傾げて。

「凄い・・・無駄な気がします。　客商売って、大変なんですね」

杏子は頷いて。　彰檎に色々教えてやった。　杏子は、今の会社に入る前は、何でもアルバイトでイベントホールの展示物のスタッフもやっていた事があり。　着物や、ドレスや絵画なども担当していたらしい。

さて、半フリープランのツアー旅行ながら、松虫教授の親族の経営する旅館だ。　朝は、バイキング形式で、洋間の広々とした食堂一つ貸し切ってあった。　しかし、そこに並ぶ料理は抜かりの無い和洋の数々で、デザートも和菓子とケーキやフルーツとより取り見取り。

彰檎は、自分の三倍は皿に盛って席に着く杏子を見て。

「杏子さんって、全てにおいて凄いです・・・僕、尊敬します」

杏子は、喜んで。

「うむ、尊敬してたもれ」

と、笑った。

さて、杏子が１時間で、彰檎の２０倍は食べた事などどうでもいい事であり。　松虫教授夫妻に驚かれて、奥さんに頼もしがられた事もどうでもいい事だ。　と、周りの驚きの眼差しを貰った彰檎は思いたかった。

９時半を過ぎて、晴れ渡る蒼の空の下、行く人を募って櫻の薗へ。

女将に見送られ、バスにて３０分程度の乗車。　何せ、観光では取り上げてある上に、櫻が五月でも見られるのは、ここから上でしか

ない。　道路は、見物客の車で渋滞しそうな勢いであった。

「う～ん、お客が多いの～」

バスの中、彰檎と通路を挟んで座る松虫教授が、１０分で行ける所が、こんなにも時間が掛かったので困惑したのだ。

しかし、彰檎は、携帯を取り出して。

「教授、どうやら口コミ掲示板にここの櫻が載ってます。　東北でもあちこちもう櫻は散ってますし、此処は櫻見物の穴場みたいに書かれてありますね～」

白いハットに、白いスーツの松虫教授は、困った顔で。

「知る人ぞ知って穴場だろうに・・・こんなに人が居ては穴場ではないわい」

駐車場は、バスを停める場所も苦労する程の車があった。

降りた松虫婦人は、

「去年は、楽々停められたのに。　今年は、違うみたいねぇ」

３０人ほどが、降りた。

残り、乗っている人も居て、他の観光名勝を回るのだ。

しかし、駐車場から見える櫻の大木は、美しい桃色の花を満開に咲かせていた。　聞いていた去年の櫻の乏しさは何所の話か。

「うわ～、ここからでもキレイだわ～」

杏子は、見える桜に誘われて。

「ほれ、彰檎クン。　いこいこ～」

「あ～、ハイハイ」

引きつられて、彰檎も入園した。

最初は、ソメイヨシノの櫻が満開の公園。　６０００本の木々が、爽やかな風に揺られて淡い薄桃色の花びらを見せていた。　此処は、野原公園にもなっていて、大勢の家族連れがビニールシートを引いて、ピクニック気分だ。　ソメイヨシノの野原の面積で、野球場１０個分に相当するらしい。

「満開だね～、彰檎クン」

春物の白いセーターに、薄いベージュのハーフコート。　ズボンは、水色。　春めいた姿の杏子は、髪も今日はお団子にして可愛らしい。　若々しく見えて、彰檎とは恋人みたい。

一方、彰檎は変わらずの、黒ずくめ。　黒いジーンズに、黒いカジュアルシャツに黒いコートので、サングラスでもしたら、チョト怖い。

ヨシノ櫻の次は、いと櫻。　古木に多く見られる事でも有名な枝垂れ櫻である。

しだれ櫻は、どれも古木や大木が間隔を開けた仕切りに堂々と咲いていた。

「僕、これが好きですね・・・。　なんか、ちょっと控えめでいいです」

彰檎は、そう言って一つ一つ櫻の木を見上げる。

杏子は、その見る彰檎が何時もよりも優しい顔つきになっているのが解って、自分も微笑ましくなる。　彰檎は、ピアノを弾いていたり、子供を見たりしない時は、少し冷めた顔しかしないからだ。

薗は、幾つものエリアがあり、全部回るのは二時間以上は掛かる。

途中、櫻博物館なる所で、櫻の色々なエピソードや、生態を知ったりして。

お昼時、杏子とオープンテラスカフェにて、軽食を。

彰檎は、ヤキソバ３人前に、フランクフルト１０本の杏子が、

「待ってて、今焼きおにぎり買って来る～」

と、言って行ってしまう。

「・・・宿代浮いたのに・・・」

と、彰檎は苦笑してフランクフルトを１本取った。

戻った杏子は、昔の櫻の物語を。

「昔ね～、おにいちゃんが幼稚園の卒業式でサクラ貰ってね～。
いや～、ウチの庭に何本も
サクラあるけど。　おにいのが一番キレイだった。　んでね、その
櫻、一回ね。　道路の拡張で切られそうになって、ジッチャンと二
人で植え替えの計画じゃないと嫌だーーって町の職員に食って掛か
った事あったわ～。　懐かし～」

（昔・・・あ、幼い頃から変わってないんだ・・・杏子さん・・あ
はははは・・・）

内心でも、“昔”と云うのが憚われた彰檎であった。　口に出した
ら・・・・。

さて、食事が終われば、次は八重櫻や紅桜の薗に。

咲く時期を上手くずらして、各種類の櫻を咲かせ続け、咲かせ誇ら
す薗。

その美しさは、もう形容しがたい物で、何千本という櫻の楽園がま
さしく此処にあるといえる。　ある意味、自然のアートであろうと
感じれた。

さて、違う櫻の区分に入った彰檎が足を止めた。　１０メートル位
の櫻を見上げて。

「この櫻・・・もしかして、楊貴妃？」

杏子は、重なり合う桃色の花びらがキレイで、フリルのように思え
た。　見る立て札にも、“楊貴妃”と、品種名が。

彰檎は、楊貴妃櫻と柵と通りを隔てた隣の緑色の櫻を見て。

「あれは、御衣黄・・・・おおしま櫻・・・・・」

隣の櫻は、緑色の花の櫻であった。

杏子は、二色の花がハラハラと散る間に立った彰檎に、

「良く知ってたわね。　あ、博物館にあったのだなぁ～」

しかし、彰檎はそこで話さないまま、交互にその櫻を見上げている

杏子は、不思議に思った。　散る櫻が花ごと落ちる様に見える二つの桜の間に居る黒いコートの彰檎が、一瞬櫻に抱かれているように見えた。

近づいた杏子に、彰檎は。

「ここ・・・母さんに見せたかった・・・こんな場所・・・あったんだ・・・・・・」

杏子は、彰檎が泣いているのに気付いた。

「お母さん・・・？」

「母が、良く言ってたんです・・・」

“緑の櫻って知ってる？　とってもキレイなのよ。　あと、楊貴妃って櫻も、桃色でキレイなの・・・。　貴方のお父さんの別荘の庭

にあってね・・・。　一回だけ見た事あるのよ”

杏子は、彰檎の父親が由緒正しい家に養子に行った事を思い出す。

「父と、一時的に隠れた場所だそうです・・・。　もしかしたら、僕が授かったのも其処かもしれません・・・。　母は、その櫻の事を良く言ってました」

“緑の櫻は、まだ大きくなかったから、彰檎ちゃんね。　楊貴妃櫻は大きかったから、お母さん”

彰檎は、手を出して楊貴妃櫻の花びらを手にすると。

「病気・・・良くなったら・・・二人で探そうって・・・。　こんな・・こんな所にあるなんて・・・・」

杏子は、彰檎を見て思わずそうしたくなった。　御衣黄の緑の櫻を手で受けると、彰檎の手平に入れてあげた。

「？」

彰檎は、杏子を見る。

杏子は、微笑んで。

「これで、彰檎クンと、お母さんは一緒・・・ね？」

彰檎は、頷いて櫻の花びらを見た。　しっかりとした桃色の楊貴妃櫻と、薄緑の御衣黄櫻が、折り重なり抱きしめ合うようだった。

二人、ベンチに座った。客がその通りは少なくて。　櫻の見物には持って来いだ。

彰檎、手の平の櫻を見ながら。

「杏子さん・・・僕、一回だけ。　ピアノでお金稼ごうと思った事・・・有ったんです。　一回だけ・・・」

杏子は、思い詰める彰檎の横顔を見ていた。

「それって・・・お母さんが病気に成ってから？」

「はい・・薬のお金・・・欲しくて。　でも、久しぶりに叱られました。　自分の為に・・・勉強の時間も、自分と一緒の時間も、犠牲にしないでと・・・」

「・・・そう・・・彰檎クンの事、お母さんも好きだったのね・・・病院に入れば離れるし、もし働いている間に死んでも一人だもんね　もしかしたら・・・一緒に居れる時間が短いの・・・お母さんは知ってたんじゃないのかな」

「はい。　恐らくは・・・・。　しかも実は、母は僕に奨学金があれば大学に行ける様にと僅かですがお金・・・残してくれました。　自分は、葬式も要らないし・・・火葬して灰は海にでもと・・・。　でも、僕は母を海に流す事も、どうする事も出来ず。　他県の墓地に入れてあるんです。　大学は後でもいいと思って・・・そしたら、杏子さんが・・現れて・・・本当に、感謝してます」

「そっちに、お金・・・使ったのね」

「はい・・・」

彰檎の瞳には、何か記憶を見ているようなぼんやりした瞳だった。
だが、何時になく素直で、涙を流す瞳は、彰檎の心を映していた様な気が杏子はしていた。

「母の最期は、物凄く静かで・・・眠るように死にました。　手を握る僕に・・・・」

“彰ちゃん、櫻・・・見に行けなくてごめんね・・・もう少し長く一緒に居れなくてごめんね・・・でもお母さんは彰檎っていうお花が見れたから、幸せだったよ”

「そう言って、涙一筋流して・・・逝った母は、お花がとても好きだったので。　どうしても、四季折々花が咲くあの墓地に埋めたかったから、お金は使いました。　１０年は、お寺の住職さんに管理して貰えるようにしてもらいましたし・・・」

杏子は、彰檎の最後の母親孝行だと解った。

「なら、大丈夫でしょう。　彰檎クンのお母さんも、きっと喜んでるわ。　自分の子供に、此処まで思われて、してもらえたら満足というか・・・本望だわ。　お彼岸に居なかったのは、そこに行ってたのね」

「はい、合格の報告と、杏子さんの事・・・言いに・・・」

杏子は、並ぶ彰檎の頭を自分に抱き寄せた。　二人、頭が隣合う。

「今度は、私も行く。　こんないい子産んでくれてありがとうって

言わせて貰うわ。　自慢の従姉弟・・・彰檎クンのお礼」

彰檎は、初めて女性の温もりを母以外で感じた気がした。

「杏子さ・・・ありがとう・・」

「うん」

もう、2時を回っていて、彰檎達を探していた松虫夫妻が近くにいた。　話を途中まで聞いて、離れたのだ。

教授は、花ごと落ちるような櫻を見て。

「花の中でも、櫻は不思議じゃな～。　人を和ませ、人を素直にさせる・・・御繰君が、あんなに寂しい過去をもっとるとは・・・知らなんだ。　影は在ったが・・・ふむ」

すると、奥さんは。

「でも、心配は要りませんね。　彼には、杏子さんと云うお姉さんが居ますから。　うふふ、あの二人は、お似合いかもしれませんよ」

と、旦那の教授を見て微笑む。

教授も、奥さんを見てニッコリ。

「まるで、ワシ達みたいじゃな。　あはははは」

奥さんも、口元に手を当てて、笑った。

櫻と杏子に癒されて、彰檎はその日の夜も、女将の願いで夜のステージにピアニストとして居た。　眼を閉じて、優しく奏でる彰檎の心の内には、二人の女性の顔がある。　一つは、母。

もう一つは・・・・。

今宵も、教授夫妻と共に聞く、杏子の顔である。

１３、特別編・櫻の薗（後書き）

どうも＾＾　騎龍です＾＾

遂に、ピアニストも中盤に入ってきました。

いやいや、他のネタと違って、恋愛やってみようかと即興で作った作品ですから、勢いで脱線して行く＾＾；

なんとか、最後まで書き上げますので、これからもお付き合いください＾＾

１４、Ｇ．Ｗの後編

１４、Ｇ．Ｗの後編

「ううん・・」

彰檎は、窓から差し込む朝日と、右足が布団からはみ出した寒気から眼が覚めた。　ボ～っとした顔、彰檎はとにかく睡眠が深く、一度寝たら６時間は起きないほうだ。

しかし解せない問題は、今考える寝相である。　いつも、布団からはみ出す寝方などした事が無いだけに・・・。

（ん？　・・・妙に左が温かいんですけど・・・柔らかいし・・・）

隣を見た。

「・・・・・」

彰檎、静かに天井を見てから、

（そんな・・馬鹿な・・・）

もう一度、横を見る。

「ス～、ス～」

寝息を立てる物体が居る。　しかも、さぞかし満足そうに・・・ニタニタして・・・。

（ありえないでしょ・・・・・）

彰檎は、従姉弟で姉のような存在の杏子が、隣で寝ているのに震えが来た。　しかも、浴衣姿で緩まった胸元が開けて、ムッチリとした谷間が丸見えだった。

「死ぬ・・・・・」

ゆっくりと起きて、自分が正規の場所である居間の場所で寝ている事を確認。　しかも、寝室のふすまが開いていて、杏子の布団はもぬけの殻状態。

（やられた・・・）

潜り込まれたのである。

「ふう・・・」

彰檎の見る杏子は、本当に３０なのかと疑いたくなるくらいに女らしい。

まだ、朝の６時前で、お茶でも飲もうかと起きた。　さて、トイレに行って。　ケータイでニュースをチェックしたり、天気を注意して見たり。

（今日も晴れるのか・・・。　そう言えば・・・他日帰りで行ける観光スポット探してみようかな）

と、一階のロビーでパンフレットを取り、ついでにパックのジュースを自動販売機にて買って、戻ろうとした時だ。

「あら、彰檎さん」

呼ばれて振り向けば、女将が居る。

「あ、どうも。　お早う御座います」

「こちらこそ、お早う御座います」

今日は、青の色で森をイメージした模様の着物を着ている。　髪もしっかりと結い上げて、もう女将としての様相だった。

彰檎は、腕の時計を見て。

「やはり朝は早いんですか？」

笑う女将は、営業の声よりやや親しみ深い声で。

「はい、毎日5時半までには起きてます」

「夜も遅くて、朝早いと大変ですね」

女将は、腕で口元を隠して笑い。

「商売なんて、みんなそんなものです。　お客さまより遅く起きては、サービスできません」

「成る程、確かに」

「彰檎さんは、何時もこんなに早く起きていらっしゃいますの？」

「いえ、昨日はあれから直ぐ寝たので、起きてしまいました」

二人、二階に上がる階段に向かいつつ。

「でも、お姉さんが綺麗で仲宜しくていいですわね」

「はい、従姉弟なんですが・・・居候させてもらっています。　優しいと云う点では本当にいいお姉さんですね」

「あら、従姉弟なんですか・・・」

女将の様子がちょっと変わった。

だが彰檎は、気に付かないで。

「では、朝ごはん楽しみにしています。　ご苦労様です」

「はい・・いいえ・・・」

別れた二人。

「・・・・」

女将は、彰檎の背中を消えるまで見ていた。　丸で、分かれる恋人を見るような・・・。

部屋に戻ると、まだ杏子はのほほ～んと寝ている。

「ふう・・・」

彰檎は、笑みも含めてため息を一つ。　また、窓の外を見ながらオレンジジュースを飲んだ。　お茶を買うつもりだったのだが、売り切れていた。

「さて・・」

地図付きのパンフレットを三つ見比べて、観光名勝を探して見た。

杏子は、８時近くになって起きた。

「む・・しょ～ごクン・・・起きたな」

布団の中から、窺う杏子。

「はい、起きました。　お早う御座います」

「ほい、お早う」

「今日はどうしますか？　牧場とか、山のダムの景色とか、あと・・・お寺もありますよ」

少し寝ぼけている杏子だが、すまし顔より笑みのある彰檎の顔を見て、昨日の櫻の薗は彼にとっていいほうに作用したのを見た。

（彰檎クンにとって、心の支えだったんだもんね・・・そら泣くわ）

杏子は、そう思っていたから、今日は彰檎がもっちょと落ち込んでいるかとも思ったが。　そうでも無い。

「ん～・・・牧場ってステーキ食べれるかな？」

彰檎は、ピタリと止まる。

「あ・あはは・・やはり、そこですか？」

「きまっちょろ～が」

「ええ、食べられますよ・・・有名牛肉・・・」

「おし、決定。　お馬さん見に行こう～」

「乳搾りとか体験出来るみたいですけどね」

「ほおお～、牛乳は搾り立ては美味しかよ～」

杏子は起きる。

彰檎は、柔らかい杏子の胸元が見えているので、眼を瞑り。

「杏子さん、胸・・・見えてますよ」

杏子は、パッと見た後に、

「見たい？」

「見てどーするんですかっ！」

彰檎は、顔を赤くして恥かしがった。

杏子は、起きて。　艶っぽい声で、ショウのモデルの様に歩いて着替えに行きながら。

「勿体無い、昨日は上も下も着てなかったのに・・」

彰檎は、もう身体中が熱くなって、動かなくなった。

さて、今日の朝は日本食の定食だ。　外の庭園を望める宴会場が開放され、他の一般のお客と一緒の食事だ。　座敷の入れ込みと、テーブルと椅子の食堂があり。　彰檎と杏子は、椅子に座った。

各自セルフで取るのだが。　ご飯と味噌汁と、おかずのお代わりは自由で。　生卵と目玉焼きの選択も可能。　中でも、漬物のバリエーションが多くて、女性や年配者は喜んでいた。

食べる彰檎も、

「うわ～、糠漬け美味しい、帰りに買って行きたい」

貧乏なだけに、彰檎は何でも好き嫌いなく食べる。

そんな中、女将が途中で客席を回って来た。

「お早う御座います。　お味、どうですか？」

杏子は、赤いタイトのセーターを着ている。　化粧もしてない顔だが、綺麗である。

「美味しいです。　朝から、得した気分です」

笑う杏子。

対象に、女将は客前だから化粧もしっかりしているし、着物も艶やか。

彰檎は、お早うの挨拶以外は頷くだけだった。

女将は、どうも彰檎に取り付く言葉も見つからず。　礼をして去る。

杏子は、彰檎に。

「彰檎クン、今日の女将さんって、なんか違わない？」

言われた彰檎はさっぱり解らない。

「はあ・・・そうなんですか？」

杏子は、彰檎を見て渋い顔。

「しょ～ごクン、お化粧の仕方も、いつもよりこう・・若く見せてるし。　何時もの髪型と少し違うでしょ？」

「・・・ですかね・・・」

彰檎は、サッパリだ。　彰檎はそうゆう所には疎い。

「もう、彼女できないぞおおお～」

彰檎は、キッパリと。

「出来なくていいです」

杏子は、目を細めて。

「何で？」

彰檎は、外の庭園を見て。

「僕・・・そんなにマメじゃないし。　あんまり、希望持った事ないですね」

杏子は、呆れた顔で。

「彰檎クン、よそ様に言ったらいけんよ・・・怒られるどおお～」

「はあ・・・そうですかね」

杏子の悩みの一つは、この彰檎の自覚の無さにある。　母親とひっそり暮らしてきた彰檎は、自分を表に出す事をしなかった分。　自分の能力のどれにも自覚が足らない、そしてこの素っ気無い言葉では、普通の人からしたら怒るだろう。

（彰檎クンは彰檎クンだけど、もうちっとこ～な～・・・）

生卵に、醤油をたらしてご飯に掛けた。

９時半を過ぎて、松虫教授夫妻にロビーにて呼び止められて。

「おお、ご両人」
彰檎は頭を下げて。
「教授、お早う御座います」
杏子も、ピシっとして。
「お早う御座います」
二人は、夫妻に頭を下げる。
松虫教授は、昨日と同じスーツに帽子を被り。　奥さんは薄紅色のレディースーツ姿だ。
「いやいや、お早う。　所で、今日はどちらへ行くのかな？」
彰檎が、パンフレットを取り出して。
「牧場と、渓谷の観光に行って見ようかと」
夫妻は笑って頷き。
「おお、ならわし等と一緒じゃないか。　ご一緒させてもらおうか」
「ええ、そうですね」
松虫夫妻をみて、杏子が先に。

「どうぞ、多いほうが楽しいですから」

彰檎も頷いて。

「はい、よろしくお願いいたします」

と。

バスに乗って、先ずは牧場に。

向かうバスの中で、彰檎と杏子は他のオバサングループと仲良くなり、牧場まで行動が一緒だから賑やかな一団となった。

牧場は、高原に広がる風景で、山の中の動物園みたいだ。

「ほれ、彰檎クン。　ヒヨコ、かわ～いいな～」

「ですね～」

ピーピー言う黄色いヒヨコが、一匹５００円。

杏子、値段を見た後に彰檎を見る。

彰檎、眼を細めて。

「何所に置くんです？」

杏子は、苦笑いで。

「だよね・・・つい田舎の気分に・・・あはははは」

彰檎は、呆れてため息が漏れる。

次は、牛の乳搾りの体験コーナー。　オバチャンたちが、ギャーギャー言って迷惑そうな牛の横顔を見たり。　杏子と松虫教授が豪く上手い搾り方で搾乳する。

最後は、彰檎。

「・・・・」

「・・・・」

連れてこられた牛が、何故か彰檎を凝視してくる。　彰檎は、遣り難くて牛と見合う。

「やだ彰檎クン、牛とお見合いしてるの？」

笑う杏子。

牧場の人も、笑って。

「な～んか気になんだっぺな～。　あはははは」

（み・・見てるんですけど・・・・もの凄く見られてるんですけど・・・）

ま、やれば彰檎も手先が器用なだけに上手だ。

牧場のオッサンが。　笑って言うに。

「都会っこでも、上手いもんだべ。　もしかしたら、夜は“乳搾り”の練習してっかな？」

オバチャン達は笑って、

「オジサン、からかっちゃだめよ～」

教授も、彰檎の顔の良さだけに納得して。

「ナルホドな～」

と、深い頷き。

杏子も、恥かしいやら苦笑して。

「ま、いやらしい」

しかし、言われた本人は意味が解らず、周りを見ていた。

山羊の放牧体験や、馬の騎乗体験などをする。　元農家の杏子と、庄屋の若大将だったと自称する教授のなんと場慣れしたことか。彰檎は、山羊に仲間扱いされ、馬には舐められていた。

「よし、全員分奢るぞ」

の松虫教授の声で、牧場内のステーキハウスで、ステーキの定食を食べる事に。

その時、セルフのドリンクを取りに行った時にだ。　彰檎は杏子に

聞いてみる。

「あの、杏子さん。　質問あるんですが」

「ん？」

ふたり、グラスに烏龍茶と氷を入れる中で。

「先ほどの、牛の搾乳してた時、牧場の方が夜の搾乳がどうのと言ってましたが・・・どうゆう意味ですか？」

杏子は、彰檎をパッと見て。

「解らなかったの？」

「はあ・・・」

杏子は、背の高い植木鉢の影に誘って、

「彰檎クン、男と女が夜になるとベットの上でするのよ　特に・・・男の人がね・・・」

「あ゛」

彰檎も、やっと気付いて赤面する。

杏子は、その顔に本当に今気付いたと解り。　悪戯心を刺激されたのか。

「彰檎クン、帰ったら夜にさせてあげようか？　ち・ち・し・ぼ・

り」

色っぽく言えば。

「ゲホゲホっ・・い・・いいえ・・いいです・・」

彰檎は、あたふたして咽ていた。

さて、値段が張るだけに、出されたステーキは３００グラム。　少食の彰檎と、痩せた松虫教授は、途中でダウンして死んだ。

「まったく、食べ物を無駄にしたらいけませんよ」

と、教授の奥さんが、教授の食べ残しを食べて大満足。

杏子も、

「彰檎クン、そうよ。　出されたものは食べないと」

と、彰檎の残りを平らげた。

彰檎と教授は、座敷で横になり。

「教授、女性って強いですね・・・」

「あああ、結婚すると・・・もっと良く解る・・・滅茶苦茶に強い・・・ゲップ・・」

二人して、白旗を挙げていた。

さて、午後は近くのダムから見える新緑の山の光景や、渓谷の風景を満喫して。　夕方も暮れた頃に戻った。

教授は、風呂に入ってから宴会３日目に突入して歌い捲くる。　今時、“イイェーいベイビーっ！！！　ノってるかーい！！！”も、珍しいだろう。

杏子と彰檎は、教授を見て楽しんで、教授の奥さんやオバチャンたちの世間話に巻き込まれていたり。

しかし、夜８時を回るとお座敷に女将が来ていた。

「こんばんわ」

挨拶を交わす皆。

女将は、お客の相手や、教授に手を振ったりとしていながらも。
どうも、様子が変だ。

気付いたのは、杏子。

（ヘンね・・・今日は夜のコンサート無いし、他にお客さん居ないのかしら・・・）

田舎の町では、杏子の親戚も旅館をやっている。　大きい旅館なら、この時期には女将直々に相手をしなければならないＶＩＰのようなお客がいるはず。　そうでなくとも、女将は１０時近くまで居て、女中さんが何度も呼びに来ていた。

宴会がお開きになり、杏子と彰檎はヘベレケ大将の教授を部屋まで

送り、奥さんのお礼を貰って退散した。
部屋に戻れば、杏子はニタニタとして、
「んふっふっふっ・・・」
彰檎は、バッと身構えて。
「な・・なんですか・・・ヘンな声出して・・・」
「イヤイヤ、なんでもないっすよ～」
杏子の目は、悪戯っ子のように笑っていた。
彰檎は、ブルブル震えて。
（ヤバイ・・・ヤバ過ぎる・・・）
杏子は、荷物を直して。
「明日は、予定なんだっけ？」
彰檎は、貰った予定表を見て。
「帰るだけですが、バスで港に行くそうです。　大きい漁港なので、朝市もお昼までやっているので、自由行動が1時間半あるとか。後は、新幹線でお帰りですね～」
「なるほど、牧場と櫻の薗で買ったお土産じゃ～物足りないから、そこでも買お～」

「ですね」

杏子は、彰檎が布団を敷いた直後に、

「そ～れ～」

と、隣に自分の布団を持ってくる。

「あ゛」

彰檎が唖然とする。

杏子は、布団に入ると。

「最後の夜よ。　思い出作る？」

彰檎が、ガックシと肩を落として項垂れた。

明日は、予報では冷たい雨が降ると言っていた。　彰檎は、冷え性の杏子の人間湯たんぽにさせられたのだった。

次の日。　明けた朝は曇り空。　パラパラと氷雨が振り、北風の影響からか、一気に冷え込んだ。

朝7時頃である。

「さむ～い・・・なじぇ・・・ラストの日に・・・」

布団の中で、震える杏子と・・・。

（何時まで僕を離さない気なんですか・・・・）

杏子にしがみ付かれている彰檎である。

「杏子さん、起きましょう。　もう、朝の支度しないと」

「う・・うい～」

吐く息も薄っすら白く、２０度近い気温だったこの旅行数日が嘘のようである。　顔を洗い、歯を磨いて、二人は最後の朝食を食べに行った。　今日は、バイキングがあって、一昨日と同じ場所で食べる事に。

「おお、お早う」

「お早う御座います教授」

松虫教授夫妻に、女将の組み合わせと出会った。　女将は、白い生地に梅と鶯の素晴らしい着物姿。　廊下を行く男は皆見てしまうだろう。

しかし、挨拶も少なく。　教授と旅行の思い出など言いながら行く彰檎の背中を、女将が見送ったのを杏子は取り皿を渡すときに見た。

（あ・・・そう言えば・・・まだ独身って言ってたなあ～）

女将は、まだ２７の若女将で。　独身だとか教授が言っていた。

（そうか・・・そうゆう事ね～・・・）

杏子は、やってきた彰檎に皿を渡しながら。

「ほい、罪作り」

「は？」

彰檎は、ポカ～ンと杏子を見ていた。

食事は無駄話で終わり。　９時にはバスか出発する。

バスに乗る時に松虫教授と彰檎に、女将がわざわざ来て。

「夏休みか、大晦日にはいらっしゃいますか？」

と、聞いていた。

教授は、

「暇があれば、また来るよマリちゃん」

と笑って言う。

「はい、是非また来て下さいね。　伯父様」

と、女将は笑って言い返すのだが。

彰檎は、

「お世話になりました。　機会があれば」

と、言い。　教授より先にバスの中に入って行く。
乗る前に見る杏子は、彰檎を見ようとしていて見切れない女将を見て。　彰檎に淡い恋心を抱いた女将の口に出せぬ声を見た気がする。

「ご飯も温泉もとっても良かったです。　来年の櫻、是非また見に来ますね」

と、笑って言う杏子。

女将は、笑顔ながら何か影を見せて杏子を見た。

教授の奥さんが挨拶して、バスに乗る。

更に来るお客の為に女将は笑顔でなければならない事が辛かったのか。　そっとバスの脇に回って、窓から中を窺った。

なにせ、彰檎は疎い。　しかも、今まで自分を最小限にしか出して来なかった生き方が染み付いている。　人に余り目立たないように、そして気にしないように・・・。　だから、人の自分に対する気持ちを察しようとはしないのだ。

（いいようで・・・悪いようで・・・彰檎クンは彰檎クンでしかないもんな～）

杏子は、バスに乗っても窓際に座りながら、パンフレットを見る彰檎のいつもの顔を座って見た。

「ね、彰檎クン」
「はい？」
窓の外を見た杏子は、女将が脇に回っていたのを見て。
「ほら、女将さん」
彰檎は、見て。　手を振る女将に挨拶して。
「いい旅館でしたね」
と、またパンフレットを見る。　バスが走り出して旅館を後にして行く。
「彰檎クン、人助けしたね」
「そうですね。　僕はただピアノを弾いただけですが・・・人助けですかね」
杏子は頷いて。
「うん。　女将さんには、スーパーヒーローだったのかも。　彰檎クン」
彰檎は、杏子がヘンな事を言うので、杏子を見た。
「僕みたいのが、スーパーヒーローですか？」
「そ。　ピンチの時に来て、最高の必殺技で人助け・・・ホレちゃ

うぞ。　ヒロインは」

「どうしたんですか？　急に」

「ん～。　いや、今考えてみると・・・彰檎クンは3回もヒロインを救ってるんだよね・・・」

彰檎は、意味がサッパリわからない。

「僕、そんなにピアノ弾いてませんよ」

杏子は、鈍い彰檎が憎たらしくも可愛くも思えた。

「違うわよ」

周りでは、ガヤガヤと他の人達が喋る。　その中で、杏子は。

「最初は、彰檎クンのお母さん」

彰檎は、杏子の顔に釘付けになった。

「母・・ですか？」

杏子も女、なんとなく解る。

バスが、氷雨の降る中で、新緑深い森に挟まれた道を行く中で。

「だって、そうでしょ？　愛した人に捨てられる絶望の中で、彰檎クンって言う愛する命を授かって・・・しかも、彰檎クンがお母さんに真直ぐに愛し返して・・・。　一人なら、心の支えも無いから、

自殺だってあるかも・・でも、彰檎クンが居て。　お母さんは頑張れた」

彰檎は、母との日々で母に感謝されなかった日々は無かった。

杏子は、続けて。

「そして、二人目は私・・・。　正直、彰檎クンに会うまで、もう男なんて死ねばいいって思ったし・・・寂しかったし・・・誰にも尽くしてない・・尽くされないって思ってた。　たった5ヶ月、5ヶ月よ。　今は、恋愛しても・・・いいかなって思ってる。　うん。
　子供欲しいって思うし・・・男の人も人それぞれって思える。
キミのお陰、ピアノ弾いてくれるヒーローのお陰」

彰檎は、下を向いた。　杏子を思ってしている事で。　下心も何かを得ようとの欲も無い。　ただ・・・杏子の寂しさを取り除きたいだけ。　母の憂いを取り除こうとしたように。

杏子は、周りには聞こえないくらいの小さな声で。

「多分、女将さんも一緒。　そりゃ格好イイわよね。　見知らぬ人ながら、あんなに素晴らしいピアノの腕してて、御礼要らないって、ヒーローですよ。　だから、“また来れますか？”って彰檎クンにも聞いた・・・ん？」

彰檎は、困った顔で。

「そう言われても・・・頼まれただけですし。　なんて言っていいか・・・」

「そうね。　でも、せめて笑顔で、“また来たいです”って言ってあげてもいいんじゃない？　毎日の忙しさに、彰橋クンの事忘れて行くとしても。　櫻だって、木は同じでも花は其の年一回きりじゃない。　でも、また見たいって思うでしょ？　いい思い出くらい、残してあげるのよ～」

「はあ・・」

杏子は、生返事した彰橋の耳に、片言になって。

「イイカ、ワカモノヨ。　キミガハハニムケタアイハ、イッショウモノダゾ。　コンドハ、ソノアイジョウヲダレニムケルカダ」

彰橋は、驚いて杏子を見る。

「ムフフ、ワタシガホシイ」

杏子は、また悪戯みたいに笑って言う。

「し・侵略者みたいですね・・・」

「愛を侵略してみようか。　おし、東京帰ったらＤＶＤ借りにいくべ。　恋愛モノとウツージン物で」

「宇宙人モノって、ありますか？」

「あるわよ。　いっぱい」

「あんまり、映画見た事ないんでわかりませんが・・・」

杏子、頷いて。

「おし、どうせ６・７日は土日だい。　徹夜して観たろ」

「え？」

彰檎は付き合わされる自分を想像した。　いや、現実になった。

港で買い物して、送ってもらう手はずを整え。　新幹線で東京まで。

東京駅で解散した後、マンションに帰る手前でＤＶＤを３店舗回って２７本も借り。　いきなり帰ってからはオールナイト。

初めて宇宙人の映画を見た彰檎の感想は。

（居ないでしょ・・こんなの・・・）

怖がったり、戦う地球の人にエールを送る杏子が面白かった。

彰檎の脳裏に、感謝する母の記憶がフッと湧き。　杏子を見て。

（愛情を・・・向ける相手・・・か・・）

徹夜して見た映画は、彰檎にはちんぷんかんぷんで、恋愛映画はいいとしても。　宇宙人映画はマンガか特撮物のようにしか映らなかった。

１４、Ｇ．Ｗの後編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ＷＢＣ見ながらやってました＾＾；

日本勝って嬉しかったですが・・・内容が長くなってどんなもんかとおもってます＾＾；

これからも、ご愛読宜しくおねがいします＾人＾

１５、初夏の嵐・前編

１５、初夏の嵐・前編

G．Wも過ぎ去って、何時もの毎週が訪れているある土曜日。

「とりゃ、えいっ」

「ああ・・・また負けました」

雨の降る外。　買い物にも、お出かけもする気が無い杏子に付き合って。　彰檎は通信対戦のゲームをしている。　二人して、携帯ゲーム機を持っていた。

「ムフフフ、弱いのお～」

自慢げの杏子は、モスグリーンのサマーセーターに、白いジーパン姿。

「杏子さん、キャリア長いんでしょ？　僕は、最近ですから・・・勝ち目ないですよ～」

彰檎は、黒い襟のあるカジュエルシャツに、黒のジャージであった。

杏子は、ゲーム暦が長いようで、古いゲームも色々持っている。アクションゲームや、カーレースゲームが得意。

彰檎は、推理ゲームやじっくりやるゲームは直ぐに慣れる。

杏子は、長々降る雨の外を見て不安な眼差しだ。

「は～、低気圧ラッシュだね・・・来週も中頃から大きい台風来るって言ってたよね」

彰檎も、窓の外を見て。

「ですね。　何か、来週に来る台風は凄く大きくて、勢力が過去最大レベルって予想を言ってますね。　明日、明後日は、買い溜めしましょうか？」

杏子は、それよりも・・長梅雨で部屋干しに成っている服を見上げて。

「うう・・・早く乾け・・・」

彰檎も杏子も、連日激しく降る雨に普段着やらスーツを濡らされて、洗濯物を一掃させたら干す空間が無くなったのだ。　リビング、風呂場、寝室に客間。　洗い直しを余儀なくされた洗濯物も含むので、量が多くエアコンのドライモードがフル回転状態である。

杏子は、不満をゲームにぶつけて、

「もう一回勝負しよ」

「はいはい」

付き合いのいい彰檎であった。

さて、次の週に入って、月・火とスッキリしないままに、蒸し暑い日々が続き。　水曜には雨が振り出した。　木曜日には、台風の前触れの爆弾低気圧がやって来て・・・・。

「うわあああああ、また濡れたあああ～」

夕方、急いで帰って来た杏子。　どうやら傘を折られてしまったらしく、濡れたままにマンションの中に入って来る。

夜には、彰檎も戻った。

「おかえり・・・」

あまり、元気の無い杏子の声を受けた彰檎は、玄関でレインコートを脱ぎつつ。

（また、濡れましたか）

と、推測しつつ。

「ただいま、雨凄いですね」

と、入って行くと・・・・。

「うんだ。　なんて雨よ。　いきなりだよ、しかもいきなり・・・。
なんで会社出ていきなり降るのよっ。　もう！　ああ・・怖かった」

と、杏子はピンクのバスローブ姿で、食卓前の椅子に座っている。

ビールを開けて、なにやら食べているのだが。

彰檎は、パッと杏子を見てから、なるべく見ないようにして・・・。

「そうですね。　お風呂、入ってきます」

と、後ろを通る。

「私入ったばかり」

と、杏子に、

「見れば解ります。　風邪引かないように・・・」

彰檎がこう言うには訳がある。　杏子は、こうゆう時はバスローブの下は裸である事が多い。　また、からかわれても困る。

「わかってまーす」

杏子は、ほろ酔いで答えのだ。

だが・・・問題は次の日である。

カミナリの音が鳴る・・・激しい雨音が窓を打つ音が止まない早朝、彰檎は寝室で異様な感触を身体に感じていた・・・。

（またか・・・・）

ベットの上の彰檎の隣には、杏子が寝ている。　いや、しがみ付いていると言っていい。

「あうあうあうあああ・・・」

震えている杏子は、カミナリの音がする度に彰檎に縋りつく。　杏子は、何でも幼い頃に台風の夜に床上浸水した時。　避難所を間違えて大変な目に遭った事が有るらしく。　台風が嫌いなんだとか。

あまりにも風雨が強いと、怖いのだ。

「杏子さん、朝ですね・・・仕事、出れます？」

「む・無理・・・昨日からの・おおお・大雨で・・・地下鉄まで浸水してと・・止まってるぅ・・・」

「え？」

彰檎は、起きた。　杏子も、彰檎の布団を被って起きた。　二人して、天気予報を見ようとＴＶを点けてみれば・・・。

―緊急気象警報です。　今回、日本に上陸します台風８号、“ブラッドローズ”は大変な勢力を維持して北上しています。　縦１６００キロメートル、横幅が１１００キロメートルの史上最強の威力を誇り。　小笠原諸島は暴風域に入り始めました・・・・・・・・・・―

なんと、とんでもない台風である。

「うわあ～・・・・中心気圧が８９０ヘクトパスカルだって杏子さん・・・これは、ヤバイですね」

彰檎は、感心すらする台風に驚くばかりだが・・・・。

「そそそそんな暢気な・・・・彰橋ごご・・クン・・・・コアイ・・・・」

案の定、大学からは緊急連絡メールが入り、大学は今週末は閉鎖となる。　杏子も、会社に布団を被りながら電話するも、誰も出ない。

仲間の女性職員は誰も出ないとメールで来てるし、念のために人事課長に連絡すると、

「樋川さんか、いやいや私も仕事には出れないよ。　この台風は明日の夜までは抜け切らないそうだし。　家の屋根の修理をやるから無理無理」

と・・・・。

（こんな日に修理すんなあああああっ！！！！！！　死ぬ気かアンタはあああ！！！！！）

杏子は、内心そう思いつつも、

「そ・そうですか・・・御怪我無い様に気をつけてください・・・」

と、電話を切った。

さあ、瞬間最大風速１２０メートル、１時間あたりの最大降水量の１５０ミリという台風がやって来た。

もう、気象警報を知る為にＴＶは点けっ放しにして、杏子は布団を被ってプラズマＴＶに噛り付いている。

そして、今度は電話が鳴った。　彰橋が出る。

「もしもし、樋川ですが」

「あ、あはよう、彰檎クンかい？」

なんと大家さんだ。

「あ、大家さん。　お早う御座います。　台風酷くなるみたいですが、大丈夫ですか？」

「ホントよ、もう。　スンゴイ雨風で子供も学校いけないわよ」

「ですね、こちらもダメです」

「やっぱり・・・あ、そうそう。　あのね、今、関東電気会社から連絡あったの」

「あらら、何かあったんですか？」

「うん、それがね。　この台風で地上部の送電線の電気はストップして、地下の送電なんたらを使うみたいなのよ・・・」

「ああ～、じゃあ使える電力落ちますね」

「あら！　頭イイ～。　そうなのよ。　だから、夜も明かりとか点けられないみたい」

「解りました、杏子さんに伝えておきます」

「どうも～、お願いね～。　もし、何かあったら真っ先に連絡入れ

るからね」

「はい、ご連絡ありがとう御座います」

「はいはい、ごめんなさい」

大家の連絡は切れた。

杏子は、一体何なのか解らない連絡に怯えて彰橋を見る。

「何っ？！！　何よォっ？！！　私は此処から出て行かないわよっ！！！！！」

布団を被り、顔だけ覗かせて見て来る涙眼・怒り顔のお姉さんが居る。

（・・・僕が・・・何を・・・・）

彰橋は、事情を説明した。

途端、杏子は怯えて布団に潜り。

「うわーーーーん！！！　暗いのが怖えええのにいいいっ！！！」

（布団に潜るのは・・・イイんですか？）

彰橋は、杏子の姿に呆れる始末であった。

一応、彰橋はキッチンの戸棚と床下の保管庫に水や救急セットなどを全て用意していた。　レトルト食品や腐りにくいお菓子なども用

意していた。

「朝ご飯は、どうします？」

杏子は、布団から顔を出して。

「食べるわっ。　台風に負けるもんですかっ！！！　これからが勝負よっ！！！」

と、ムキになって言う。

（勝負して勝てる相手じゃないです・・・・）

彰檎は、冷蔵庫の中身をチェックした・・・。

こうして、杏子と台風の戦いが始めるのだった。

『次号、台風上陸！！！　杏子っ、永遠にっ！！！』

→（冗談です：筆者より）→

１５、初夏の嵐・前編（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

今回も、連続ネタです＾＾；

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

１６、嵐の中で。

１６、嵐の中で。

お昼頃。　窓の外の風雨は激しさを増して、雨風を窓に叩きつける。

居間で、ＴＶを点けっぱなしで朝から台風情報を見る杏子は布団に包(くるま)って顔だけが隙間から覗けていた。

節電の為に部屋の明かりの電気までは点けらないから、部屋は暗いままである。

一方、洗濯物を畳んだり、箒で軽く掃除したりと、彰檎は動いていたが・・・。　やることが無くなって、紅茶を入れて杏子に出した。

「ハイ、杏子さん」

テーブルの上にマグカップを置いた。

「あああアリガ・・・ト」

彰檎は、近くに座って、史上最大規模の台風の情報に目をやった。

「凄いですね・・・これだけだと被害も尋常ではありませんね」

杏子は、震えた声で。

「もも・・浸水が・・・」

あちこちで被害が出始めているようだった。

彰檎は、何気に。

「しかし、杏子さんみたいに怖がりは珍しいですね。　一人の時は、一体どうして過ごしていたんです？」

杏子は、布団の中からボソリと

「引きこもり・・・・」

彰檎は、呆れて笑い。

「みたい・・・ですね」

その時だ、杏子は思い出した事があり。　布団の隙間を彰檎に向けて。

「そういえば・・・彰檎クン」

彰檎は、お茶受け代わりのウェハースに手を伸ばして、

「ハイ？　なんでしょうか？」

「うん・・・一昨日、彰檎クンに手紙が来てたよね」

すると、彰檎の顔がスッと表情を無くした・・・。

杏子は、ＴＶに向いて。

「手紙の差出人・・・“華卿院”だった・・・。　中、読んだの？」

彰檎は、無言でいる。

杏子は、首を隙間から亀の様に出した。

「手紙・・・封すら切って無かったね・・・・。　彰檎クンのお父さんって・・・生きてるの？」

「・・・・」

彰檎は、黙ったままだった。

実は、杏子は手紙を読んでいた。　内容は、前に来たのとあまり変わらないのだが・・・違う点は名前・・・。　“鞠乃介”では無く、“章悟”であった。

杏子は、彰檎に遠慮をしたらいけないと思っている。　お互いに心を隠したり、触れずしてそっとしておこうと云う気持ちをも有るが聞いてみた。

「“章悟”って人が差出人だよね・・・。　彰檎クンと同じ読み方・・・もしかして・・・お父さん？」

彰檎は、黙って頷いた。

「そっか・・」

杏子は、そのまま黙った。　手紙には、彰橋に対して、母親と共に味あわせた苦労に対しての謝罪が綴られていた。

だが、杏子は彰橋の心を理解している。　彰橋は、母と一緒に貧しい生活をしていたが、その生活になんの後悔の恨みも無い。　しかし、プライドも有れば、母親の味わった苦労と嘆きは身に沁みて理解している。　今更、父親にどうこうしてもらわなくてもいいし。　いちいち存在を匂わせられるのも、我慢は出来ないだろう。　どうゆう事情であれ、彰橋と父親を繋ぐ母親が死んでしまった以上、もう彰橋に父の存在は不要なのだ。

杏子は、ＴＶを見ながら。

「私ね、昔・・・・父さんから叔母さん・・・・彰橋クンのお母さんの話聞いて、信じられなかった。　男に狂って、派手な格好して、黙って東京に出て行っても連絡もよこさずに遊んでるって・・・・・。　でも、彰橋クン見てるとね、思うんだ。　叔母さん・・・・愛に生きて・・・・信じたかった愛が壊れても、彰橋クンに愛を持ち続けて・・・・生きた。　裕福では無かったけど、幸福だったのかも・・・・。　彰橋クンが居る限り」

すると・・・・。

「杏子さん、母も伯父さんの事・・・・言ってましたよ」

杏子は、彰橋に向いて。

「なんて？　ウルサイお兄ちゃんとか？」

彰檎は首を左右に振って。

「小さい頃は、最高のヒーローだったって・・・」

「え？」

杏子の父親は、少し頑固で、優しい父親だ。　だが、顔が鬼瓦みたいでヒーローとは・・・お世辞にも言えない。

しかし、彰檎は昔を思い出しているのか床を見つめて。

「まだ、幼い頃。　母が村で迷子に成ったりすると、何時も迎えに来るのは伯父さんだったそうです。　学校で虐められた時も、帰りに変なオジサンに声掛けられた時も、助けに来てくれたそうです・・・だから・・・。」

「ほ～う、初耳だね～。　あのお父さんが・・・」

「でも、決まって最後は謝ってました・・・。　許されないから・・・連絡出来ないって・・、多分は父との事で、僕も出来ましたし。　言えそうに無い事だらけで、連絡出来なかったんだと・・・。財布には、何時も家族の写真・・・入れてました　本当は助けて欲しかったのかも・・・しれませんが・・・」

杏子は、同じ女だからなんとなく解る気がする。

「辛かったでしょうに・・・一人だもん。　本当は、家族の元に帰りたかったのかもね・・・」

彰檎は、杏子に。

「杏子さん・・」

「ん？」

「本当に・・・母の家出の理由を知らないんですか？」

「本当の・・・理由？　え・・・・看護士の大学出た後・・・東京に勝手に行っちゃったとか・・・・聞いたけど」

杏子は、父親から聞いたのは。　叔母が二十歳くらいの頃から、頻繁に男から連絡が良く来てたし。　帰ってくるのはいつも朝帰りの放蕩娘だと聞いていたが・・・。

「そうですか・・・」

項垂れた彰檎・・・。

「彰檎クン・・・違う・・・の？」

杏子は、雨風も忘れて・・彰檎を見つめた。

彰檎がボツリ・・・ポツリと語った話は、全く違う話だ。

彰檎の母親・・・美耶子（みやこ）は、九州は福岡の方に出て看護士になるはずだったが・・・。　友人が借金を抱えて、ホステスをしているのに、嘘の話で誘われた。　友人の手助けで一時だけ勤めるクラブは、いかがわしい店で、美耶子は騙されて脅されて仕事をするハメに成ったのだ。

杏子は、そんな話は聞いたことが無い。

「ええッ！！！　ホント・・・なの？」

頷く彰檎は、

「母が、死んだ後に読んでと・・・手紙を残してまして。　死ぬ間際に渡されたんですが。　全部書いてありました」

「手紙、持ってるの？」

頷く彰檎は、自分の部屋に戻って少しして戻ってきた。

「コレ・・です」

杏子は、古して色褪せた封筒を受け取る。

「読んでいい？」

「はい」

彰檎は、座りながら答えた。

手紙には、美耶子の謝罪と家族への感謝が綴られていた。

読んでみると・・・地元でのホステスで得たお金の半分以上は取り上げられていたらしい。　怖い連中に脅されていた為であり。　暴行された上に写真を撮られていたからだとか・・・。

しかし、半年して、お客で来ていた男性の中に若い医者が居て。

美耶子は恋愛関係になった上に、逃げるように駆け落ちしたらしい。

その医師が、東京で勤める為である。　だが、東京で医師と同居して、看護士に成った美耶子だったが・・。　結局は、医師が病院の偉い医師の娘さんを恋人にして、別れる事に成った上に、美耶子を騙した幼馴染が美耶子を探して来たのだとか。

（なにこれ・・・彰檎クンのお母さんって、被害者じゃないの・・・）

杏子は、知らない事実に衝撃すら受けた。

さて、美耶子はまた夜の女に戻った。　ホステスの雇用時に書いた契約書が、借金の契約書であったのだ。　５００万もの大金を背負っていた。　その借金を返済したのが、彰檎の父親なのだ。　ホステスの美耶子に同情して、恋愛関係に落ちた二人。　彰檎の父親が、お金を出して、美耶子は自由に成れたのだ。

（なるほど・・・ね）

手紙には、美耶子は少しも捨てた夫に恨みは無いと書いてあった。　自分の身の汚さに恥じてる。　そして・・・なによりも、彰檎に対しての感謝と愛情が最後の字に滲んでいた・・・。

杏子は、彰檎を見た。　黙って、蹲っている。

「彰檎クン、お母さんは・・・お父さんを恨んで無かったんだね・・・」

「ハイ・・・」

「でも、彰檎クンは・・・お父さんを受け入れる気・・・無いんだ

ね？　なら、それでいいと思う。　お母さんが、許してるんのと、彰檎クンは別だし。　彰檎クンが、お父さんと交わりたくないのも・・解る気がする」

「スイマセン・・・・杏子さんには、ご迷惑を・・・」

消え入りそうな彰檎の声、杏子は暗い中で立ち上がり。　彰檎の傍に寄ると、座って。

「寒いね」

と、布団を彰檎にも掛けた。

「ゴメン、変な事聞いて」

と、杏子が彰檎の肩を抱けば、涙を流した彰檎が顔を上げて。

「悔しいです・・・母が死んだ後に・・・僕を求めるなんて・・・。　僕は父なんか要らない・・・。　母を父に求めて欲しかったのに・・・。　死んでから・・・死んでからなんて・・・」

彰檎にとって、この事実は屈辱に近い。　寧ろ、全く関係無いと言われた方がどんなに気楽だろう。

「彰檎クン・・・」

杏子は、彰檎の心の闇を探ってしまった事に済まない思いと・・・愛情が出て。　彰檎の頭を抱きしめた。　杏子は、この日は前日のピンクのバスローブに、トレーナーのズボンを穿くだけ・・。　下着など着けていないから、彰檎を包んだ杏子の腕の中は、胸元がや

や肌蹴た温もり深い所だった。

彰檎も、迎えられた腕の中の優しさに引き込まれてしまった。　実は彰檎、母親に迷惑を掛けまいと甘える事は全て押さえ込んでいただけに、いざこうなると・・・抵抗も抑制も出来なかった・・・・。

―引き続き・・・台風の被害情報です・・・・・―

ニュースの声が流れる中で、杏子は彰檎を抱きしめたままに、床に横に成って行った・・・。

（温かくて・・・柔らかい・・・・）

彰檎は、静かに目を閉じた。

少しして、杏子は不思議と思う。

（うふふ、彰檎クン抱きしめてると・・・台風、怖くないわ・・・）

腕の中で眠った彰檎が、安らかで・・・。　杏子は、このまま永遠に居てもいいような思いが心に広がって行く。　こんな思いは、初めてだった・・・。

１６、嵐の中で。（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

勢いで書き、大した草案も無いままに心の赴くままに書いてます＾＾；

さて、最近ネタに詰まる事は無いですが。　いい加減なキモチで書くのも嫌なので、一回停止したいと思います＾＾

また、今年の終わり頃に再開出来る様に充実したいと思います＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5518f/

寝上のピアニスト

2010年10月11日03時10分発行